親を選ぶ権利

島さち子

親を選ぶ権利

装画　島　さち子

親を選ぶ権利

1　うわさ

「親なんてさ、当たり外れがあるんだよなあ。誰の子になるかなんて、運というもんさ」

池島信平がいった。

「その点、工藤なんか、ラッキーなんじゃないの。両親取っ替えて貰いてえなあ、うちなんざあ、ひでぇもんよ。無恥蒙昧、これでもさ、おれ、親の割には出来すぎた息子よ！」

佐藤爽太が、級友から笑いをとった。

「でもな、盟の奴、今度の模擬試験の成績、派手にダウンしてたなあ」

荒川秀樹が周囲を見回していった。
「なあに、苦もなく立ち直るさ。彼はエリートの家系、俺達とは、ＤＮＡが違うんだよ」
爽太が荒川秀樹を手で制した。秀樹の顎が上がり鼻の穴が大きくなる。
「するってーと、入試を九ヵ月ばかし前にして、おれのナンバーワンも三日天下かあ？　荒川秀樹、今を楽しまなくっちゃ！」
「ああ、トップ、お前だったっけ。そりゃ危険だな、工藤盟の上に出たんなら、怖いぞ！　殺されるぜ！」
池島信平が深刻そうな顔をして、脅しにかかる。
「また、また、よせやい。表現がオーバーなんだよ」
爽太が首をすくめた。
「そんなことないさ。だって、工藤のおふくろはな、高校生の時、成績がいつも二番でな、ついに切れてしまってさ。一番の同級生の弁当に、こっそり、青酸ソーダを振りかけたんだってよ！」
池島信平が用心深そうに、押し殺した声をだした。
「かっこいい！　でも、うっそー！　嘘だろう、そんなことで担いだら酷いぞ！」
爽太が大声をあげ拳を振り回した。屋外運動場の片隅、臭覚の発達した野次馬が、見る間に彼らを

遠巻きにした。
「そのトップの女生徒がさあ、気付いて、食わなかったから、未遂だったらしいけど……。でもな、もうちょっとでさあ、殺人事件になるところだったんだってよ。未遂だし、女子高で、それに町の有力者の娘ときてるから、秘密裏に処理されてしまったらしいよ。ほんとだってば！　うちのお袋、工藤のお袋とこの間の父母会で出会ってさあ、たまげたって。同級生だったんだよ。結婚してお互いに姓が変ったからな、今まで、分らなかったんだよ」
「へえ！　昔の女学生も、結構やるじゃん！　おれもさあ、常々百人ばかし殺してえと、思いめぐらしてるところよ。まあ、おめえら気をつけるんだな！」
爽太が笑い飛ばした。
「お前なんか、殺したって無駄だよ。ビリに張り付いてんだから、みんなぶっ殺してトップになったって、やっぱし、ビリ！」
池島信平は情け容赦しない。
「デェン、デェン、デェン！　お主、おれ様の実力、知らねえなあ！　知らざあ、言って聞かせやしょう！」
爽太が歌舞伎役者よろしく、大見栄を切った。遠巻きにしていた野次馬から拍手が湧き起こった。

「冗談言ってる場合じゃないよ。怖わ―いぞォ、荒川。工藤盟にはその母親の遺伝子が脈々と流れているんだ。今日の掲示板を見てた彼の顔、見なかったか？」
「うん、見た見た、唇噛んでた。盟があんな顔してんの、始めて見たなあ」
「誇り高い母親の血が騒ぐのさ、昔の殺意が息子に甦る！　殺意は簡単には消えないものだとしたら？」
「なんだと！」
思いがけなく近くで工藤盟が叫んだ。
盟のいないところで、話が弾んでいるつもりだった級友達は、驚いて振り返った。何時も大人しい優等生が、がくがく歯を鳴らし声を荒らげていた。
「で、で、で……、でたらめを言うと、ただじゃおかないぞ！」
盟が池島信平の首根っこを捕らえた。
「嘘じゃないよ。信用できないなら、お前のお袋に聞いてみなよ」
信平の言葉が盟の心臓を直撃した。盟はとっさに、母親を弁護しようと言葉を探したが、反論できる材料などある筈もない。その分、腕の締め付けが強くなって、信平の顔色が白くなった。数人が盟の腕を後から押さえにかかる。

「ひどいなあ、工藤！　おれに当るなんて、方向違いだ！」
信平が盟から逃れて、足下に派手に唾を吐いた。盟の辱めを受けた蒼白の顔に、激しい怒りが湧き上がるのを、みんなは優越感から薄笑いを浮かべて見つめていた。
「盟のママって、あの、めちゃくちゃ綺麗で、ど派手な、ひとかあ？」
誰かが素っ頓狂な声をあげた。
「当り！　父母会の役員やってるじゃん、見たことあるさ」
「くそ！　おれんちなんか、とっくの昔に、かあさんなんて、死んでらあ！」荒川秀樹が肩を振った。
「そんなもん、いない方が勝ちよ！」
信平が盟に聞こえよがしに、大声をあげた。
「いーいな、いいな、かあさん、いないの、いいな！　いーいな、いいな！」みんなが囃し立てた。
大勢の中学生に突然叩かれて、驚いた芝生の羽虫が、雲をつくって移動していく。
「お袋は、選べないんだからさ、盟のせいじゃないよ！」
荒川秀樹がみんなを嗜めるように言った。
盟の目の前が黄色くなった。沸きかえる恥辱と怒りを押さえきれない、盟のパンチが秀樹の顔に入った。続いて、腹に一発ぶちかました。驚いて逃げようとする秀樹の上着を鷲掴みにして引き戻した。

「そんなことが、あってたまるか！」
盟の耳に、喉から絞り出した自分の絶叫が返って来る。たじろいでいた秀樹が猛然と反撃に出た。胸を突かれて、盟の細い体が吹っ飛んだ。取っ組み合って、芝生に倒れ込んだ。秀樹が盟の両腕を捻り上げる。組み敷かれていた盟が、必死で荒川秀樹の向う脛を蹴り上げ、盟が上になった。秀樹が頭突きを食らわせた。咄嗟に、盟は秀樹の拳に噛み付いた。口の中で、血の匂いが広がっていく。
その時、誰かがテニスのラケットを、盟の脳天めがけて打ち下ろした。目から火花が飛び散り、盟のなかで何かが炸裂した。咄嗟に頭を抱え込んで海老型になる。
「やっぱし、お前は、お弁当殺人犯の子供なんだな。でなくて、なんで、一番になった荒川をやっつけるんだよ！」
池島信平が嵩を大きくして、核心を突いてくる。
「弁当、安心して食えないようじゃ、おれら、ほんとに、困るんだよ。あと、楽しみないんだもん」
爽太が本当に心配している。
「口惜しかったら、毒殺未遂事件は、なかったっていう証拠を持って出直してこい！」
池島信平がいい、何人かが盟の背中を足蹴にした。何人かが盟の顔に派手に唾を吐きかけると、荒川秀樹を囲んで逃げ出して行った。もう、誰一人、振り返らない。

盟の長い足が、逃げていく敵に向ってロボットみたいに不様に動き、手は脳天で、ぬるりと血を掴んだ。衝撃的な赤！　みんなは、この血を問題にしているんだ。

全身に痛みは走っていたが、生れて始めて暴力を振るったことで、盟は自分自身が変ったような気がした。何かが取り払われたのだ。

広い運動場に、誰もいなくなったのを確めると、盟は、声を上げて泣きじゃくった。

2　ママを捨てる！

午後九時過ぎになって、母の佳子が帰ってきた、盟は身構える。若い家庭教師に送ってもらった佳子は、包帯姿の息子を見ても眉を顰めただけ。以前の佳子だったら、どんなに心を痛めたか知れないのに……。男に心を奪われるようになっては、もう、お終いだな。息子が受験戦争の最中にいることなど、とうに、忘れ果てているんだから。佳子は宙に浮いたような、憑かれた表情で、車のキイを握り緊めたまま、男の帰って行く外を見ている。

「お……おまえ！　おまえは、かって、友達の弁当に、青酸ソーダを振りかけたことがなかったか！」
佳子は眼をむいて向き直った。
「盟！　母親に対して、おまえだなんて！　何時から、そんな野蛮な言葉遣いで、吃るようになったんです？」
「いいか、よく聞け！　おまえ、人殺しをやり損なったこと、なかったか？　昔、女子高生の頃さ！」
かすかに佳子の目が光った。しかし、眼光は見る間に、けたたましい笑い声で掻き消された。
「その格好と来たら……、一丁前に喧嘩なんかして！　打ち所でも悪くて、おかしくなったんじゃないの。そんな馬鹿げた話、聞いたこともないわ。全く、もう、なにを考えてるのか？　その乱暴な言葉はぞっとするわ。品性が疑われますよ！」
「はぐらかすな！　成績一番になりたくて、友達を毒殺しようとしたってのは、本当のことか？　答えろよ、答えるんだ！」
盟は体を広げ一歩前に踏出した、背なら盟の方が高い。
「馬鹿馬鹿しい。そんな事あるわけ、ないでしょう！」
「本当にやっていないんなら、証拠をみせろよ。証拠を……」
「呆れて物も言えないわ」

佳子の口が一文字に結ばれ、唇が見えなくなった。
「やっていないって証拠がないと、おれ、もう明日から学校に行けない！　みんなは、おれが、おまえと同じ事件を起こしかねないと心配してるんだ。何故かって？　よう言うよ！　おまえの息子だからさ！」
「ほんとに怒りますよ。盟はママを信じないで、一体誰を信じているの」
「おれ、嫌なんだよ。成績のことで、級友を毒殺しょうだなんて、汚いな！　おれ本当に恥ずかしかったよ。こんな恥ずかしいことって、まだ、この世界にあるのかな？　嫌だ！　もう二度と学校へは行かないよ。おれの学歴は中学中退。ざまあみろってんだ！　家庭教師はエリート校に行く為の家庭教師だ。おまえの愛人はお払い箱さ！」
「何ですって、そのいいぐさ！　憎々しいこと。それにしても、よくも、そんなことを真に受けたもんね。意地の悪いデマだってことがわからないの？　そうやって盟の足を掬おうとしているのよ。競争社会なんだから、自分より優れた人間は一人でも少ない方がいい。標的になったのよ。みんなの目的は分ってるじゃないの」
佳子は何処までも、しらをきる気だ。
「若気の過ちだった、殺人未遂ですむ問題ではないぜ。一番だった人は、それからやる気を失ったん

だってな。ところが、殺そうとした女は、一番になって平気の平座だった。心が痛まないのか？」
「人それぞれに努力の限界というものがあるわ。あの方は能力並みの成績に、落ち着いただけでしょう」
「あの方だって？　やっぱり、本当のことだったのか」
盟は本心では、何度でも佳子に否定して欲しかったのだ。盟の全身が押さえきれないほど震えていた。佳子が不用意に口を滑らした言葉は、彼を深々と傷つけてしまう。
「私達、お父さまも、あなたも、美砂も、他人より優れているんだから、友達の羨望はやむをえませんよ。工藤家は昔から、優秀な人材が輩出している家系なの。あなたにもその血は繋がっているのよ、ほんとよ！」
「おやじとおれとは違う。おれにはおまえの血が入っているんだ……努力の限界というものがあるだって？　それはある、あるとおまえは認めているんだな。ならわかるだろう、おれは中学三年でそこに達しようとしている。そう、限界にぶつかれば、いずれ、能力並みの成績に落ち着くんだ……」
盟には自分の言葉が喉元で引っくり返って、内側に向きを変えたのがわかった。今回のテストはクラスで二番だった。始めて二番になった。それも、一番との差は歴然としている。しかし、そんなことは、まあいい。問題なのは進学会の模擬テストの偏差値だった。これからだって長い長い偏差値と

の戦いが続くんだ。衝撃はぐんぐん大きくなっていく。
本当は以前からわかっていたんだ。今までの成績は母の佳子と家庭教師によって、作り上げられた空中の楼閣に過ぎないことを。自分は単なる操り人形だった。クラスで一番を張れないようでは、有名校など論外なのだから……。
「おれは、おまえに似てしまった。怖いのは同じ血が流れているってことさ。持っているのはプライドだけ、自分より出来る奴には嫉妬する。嫉妬すれば殺したくもなる。おれより背伸びした奴がいたら、ぶっ殺してやる。本当にそう思ってんだよ。おまえと同じように、何時それを実行に移さないと保証出来る！」
「馬鹿ね、自信を持つのよ。あなたは世間の有象無象とは違っているのよ」
「人でなし！」
盟が激して、テーブルの上にあったコーヒーセットを払い落とした。佳子は怯えたように身を引くと、襲ってくる敵を避けるように腕を上げた。
「こんなことを、最愛の息子に言われるなんて、もう、終わりだわ。やめて、もう止めて！　お願いよ。お願いだから、お父さまや、美砂に告げ口しては嫌よ。どんな誤解を受けるか分らないもの！」
佳子は抜け目なく保身に回った。

「嫌だ！　言いつけてやる。美砂だって、何れ誰かが耳打ちするんだ。意地の悪い奴から聞くより僕から聞くほうが、ショックが少なくてすむ。それに、自分の母親の正体を知らないよりは、知っている方がいいさ」

佳子の顔面に細波のような痙攣が走った。耐えているのだ。しかし、それにはどこまでも身勝手な理屈がついているに違いない。

後で扉が唐突に閉まった。盟が押し開けると、美砂が立ち尽していた。

「わたし、決して、許さないから……」

美砂は子供っぽい憎しみを精一杯込めて母親を睨んだ。緊張の為か、盟の鼓膜がビーンと音を立てた。随分長い時間がたったような気がした。

「あらら、二人とも一体どうしたっていうのよ」

佳子は振り返ると、別人のように華やいでみせた。いっそこんな母親なんて死んでくれたらいい、そうすれば、友達も納得して盟や美砂を受け入れてくれるだろう。苛めも、無視も怖い。

「高校受験には、内申書がいるのよ。それはクラスの相対評価だから、元々友達なんか、皆敵。勝つ為には、幻想を抱かないことね」

佳子は相変わらず、高みから注意を与えていた。父は大阪の学会に出席していて留守。帰って来た

ら話す。殺人未遂のほか、家庭教師のことも。
盟の想いに、荒川秀樹が『親は選べないんだから……』と言った言葉が繋がり合い、複雑に組み合っていた。
「美砂ほど頭が良くないにしても、他人より頭一つ、抜きん出ていようと言うあなたが、デマを鵜呑みにして、わたしに当てつけることはないわ。塾はどうしたの？　二人ともお勉強の時間でしょう。つまんない事を口実に、サボろうとしても駄目ですよ！」
佳子は、美砂と比較することで、盟を更に傷つけ、何時の間にか自信を取り戻して、すっくと立ち上がった。瞬間みせた太股のピンク色の膨らみ、この売女！　息子が母親の尻を撫でている家庭教師の動きに気がつかなかったとでも言うのか。佳子は美砂に向かって手を差し延べている。
「そんなことを、ママがする筈ないでしょう、笑っちゃうわよね。美砂、わたしがどんな願いを込めて、あなた達二人を産み、此処まで、育ててきたか、分ってくれるわね！　デマに惑わされてはだめよ。まいりましょう、さあ、わたしの可愛いい美砂！」
ひっそり立っていた美砂が佳子の腕から身を交わした。
「わたし、産んでなんて、頼まなかったわ」

3　侮辱じゃないか？

盟はクラスの友達と喧嘩したあと、学校を休んで三日目、デパートでナイフを買った。ひょっとすると、父はこの話を知っているのかも知れない。気付くと、何時の間にか、父の工藤栄介が教授をしている、X大学に来ていた。学生は皆帰った後なのか、天井の両脇に、白色灯が筋目になっているだけの廊下を、盟は真直ぐに栄介の研究室に向かって歩いた。今日まで大阪で学会があって、助手や秘書も不在。急用が出来て午前中に帰ったという栄介は、一人で机に向かっていた。盟には、たった今、何かかけがいのないものを失ったみたいに、栄介が気落ちしているように見えた。

盟は如何したらいいのか分らなくて、暫らく黙って立っていた。

「どうした？」

栄介は盟に気づくと驚いたように向き直った。

「それにしても、随分、背が高くなったじゃないか！」

栄介は首を振ると、感にたえないように言った。

「僕、お話があります。だから、一緒に帰りたいんです。男同士の話ですから……」
栄介は目だけで笑って見せた。
現実に戻った彼は良識と学識と、しかも衰えぬ活力を感じさせる。恥辱はこの人間を一方的に避けて通って行ったに違いない。盟は、ふと、そう思った。この人に僕がどんな目に遭ったかなんて、分るだろうか？　いや、今日それを教えてあげる。相談するのではない、助けを求めるのでもない。自尊心を叩かれた時は、より強い自尊心を叩き返すんだ。
「お父さんがもしも、僕だったとして、クラスで二番だったらどうする？」
「どうもしないね……、A組で二番は、いい成績じゃないか」
栄介は横を向き、書類を封筒に戻しながら言った。
「お母さんだったら、どうしたと思います？」
盟は地雷でも踏むように前に出た。
「さあ？　おまえ、二番だったの、よかったじゃないか！」
栄介は明るく言った。何でいいんだよ。何にも知っちゃいないな。
「真剣に答えて下さい。お母さんだったら如何するかって、聞いてるでしょう！」
盟が口を尖らせた。

「お母さんに聞いてくれよ。ところで、男同士の話って何んだい？」
栄介の眉間に皺が寄った。
「お母さんはね、一番の人を……一番の人を殺そうとしたんだ！」
栄介がかすかに笑ったような気がした。信じていないんだ。
「高校の時、本当の話ですよ。僕の友達のお母さんが同級だったんです。青酸ソーダを弁当に振り掛けたんだ！」
どうだ、これでも信じられないか。盟は畳み込んでいく。栄介は何か別の気懸かりがあるように、心配そうにいった。
「苛められてるのか？」
「僕、もう、学校には行けない！」
盟の声が興奮で高くなった。
「僕、もう、学校には行かない！」
更に声が高くなった。
「そうか、だったら、行かなくていい。とにかく確めてみよう。……事実でないに決まっているとは思うが、だとしても、人知れず悔い続けている場合も、全くないとも言えないからね」

栄介は変に持ち回った言い方をした。
「ママが、悔いてなんかいるもんか。刑務所にも入らないで、何故悔い改めることが出来るんですか？　罪も償わないで許されると言うんですか？　法の基本を揺るがすようなことを、何故、パパみたいの人が言うんです？」
栄介は眼を閉じ、長い間、腕組みをしていたが、はっと顔を上げた。
「真偽は別として、それは、お前と関係のない昔のことじゃないか、……許せないと言うのはお前が母親から卒業したという事かもしれない。ママがいなくとも生きていけるということなんだ。お前にとって父親なんて始めからいてもいなくとも同じことだった」
「そんなことないさ、僕は何時だって、パパを目標にして来たんだから……」
「ありがとう。でも、はっきり言うが、お前に私と同じ人生を歩かせる気なんて、ないよ。不満ばかりで幸福だなんて思ってもいないからね。いい機会だから言っておこう。お前は学者には向いていない。だから、もっと気楽に自分の道を探してみたらいい。高校受験も、有名校に拘ることはないよ、高校など、どこでもいい。長い人生からみれば短い時間だ」
栄介は、決して目線をそらさない。
「僕はパパと同じ高校に入り、同じ大学に進んで教授になる。そうするなって言うことは、僕に能力

がないと馬鹿にしているんだ！　侮辱じゃないか！　この間のテストは失敗したけど、努力すればまた一番を奪還出来るさ。なのにどうして落ちこぼれの子供に対するような言い方をするんです。酷いじゃないですか！」

かあっと血が一斉に頭に上っていくのが分った。

「いや、おまえには、ごまかしがある。中学でも高学年になるほどいらいらするようになって来たと、担任の先生もおっしゃていた。それは自分の実力と、こうありたい理想のギャップなんじゃないのか？　これから高校、大学に進むに従って、そのギャップは広がって行く。お前自身も気付いているんじゃないのか？　無理をして一貫教育のところにいっても、苦労をするばかりだよ。それより、お前は、自分の長所を生かすことを考えるんだ。推薦入学だっていい、選択を間違わなければ、お前程の能力があれば、ママ譲りの努力ができれば、必ず有能な人間になれるさ。高校から外国に留学したいなら、一緒に考えてみようよ。いいな！」

体温が上昇していく、顔が痛い。

栄介は二三の人物の例まで持ち出して、有名校だけが万能でないことを息子に説いた。盟は苛立ちで狂いそうになる。言葉が途絶え、栄介の反射する眼鏡が冷たくきらめき、口が笑いを噛みしめているように震えた。知的障害でもあるといわんばかりに、その眼つきが気に食わない。

「僕だって、自分が精一杯だってこと位分っていたさ。中学生なのに、睡眠時間を削って、削って、自尊心を守ってきたんだ。僕が頑張ってきたのは、他人じゃないよ、家族が怖かったからだ。ママが、パパが、美砂が怖かった。比較されるのが死ぬほど怖い。パパは、僕を蔑んでいるんだ。自分とは違っているぞ、そう言ってるじゃないか！　パパはママを愛したことなど、ただの一度もなかった。だからどんな前科があろうと、家庭教師とどんな行動をとろうと、その家庭教師が自分の部下であろうと、平っちゃらでいられる。そうか、家系と財産目当てで工藤家の養子になって、持参金目当てでママと結婚したんだ。人殺しだって昔のことであれば、関係ないと、たかをくくっているんだ。だから怒りもしなければ、戸惑いも見せない。ただ、そんな女が産んだ息子の自尊心を、綺麗さっぱり、木っ端微塵に叩き潰した。僕に母親譲りの血が流れているから、学者にはなれないが、人殺しにはなれる！　そう言っているんだ！」

盟はもう自分自身を制御できない。何でもいいから突っ走りたい！　佳子を脅す為に買ったナイフを、何時の間にか握り緊めていた。

僕を侮辱するものは、絶対に、許さない！　例えそれがパパでも！

盟は夢中で栄介に向かって突っ込んでいった。

4　回送車に化けた！

駅前で客を降ろし広場を一回りしたバスが、オレンジ色の四角い顔を向けると、停留所の標識の前並んでいた男女の、はるか後に立っている香川七重の前で、ぴたりと止まった。立ち作業で疲労しきった七重の足が幸運でも呼び込んだように、こ踊りしてバスのステップを捉えた。前から三列目に腰をかける。中学生くらいの少女が、座りもしないで傍に立っているが、この時間帯にしては空席が多い。あとは、目を閉じて降車の時間や距離を勘で計るだけだ。毎日通いなれた通りを、バスはかなりなスピードで走っている。何処か遠くで降車信号のブザーが押されていた。

「あれぇ！」

突然、悲鳴が聞こえ、七重の眠気が吹っ飛んだ。

「こりゃあ、なんだ！　方角が違っているぞ！」

「あれっ、何時の間にか回送車に変ってる？　止めて下さい！　止めろよ！」

七重は窓ガラスを透かし見た。バスは見知らない街を走っていた。

「この運転手、気でも狂ったんじゃないのかあ？」
戸惑った客の声が次第に大きくなった。
「お客さん、このバスは始めから、回送車ですよ。おかしいと思ったんだ、車庫に行く人がこんなに、いるとは……。方角違いの人はお降り下さい！」
運転手は興奮した声でいった。
「そりゃないよ！　早くアナウンスしてくれなければ、困るじゃないか！」
「バス停で、嫌に後ろの方に停車したとは、思ったけど……」
「この方が乗ったから、私も乗って、あなたも乗ったのよ。嫌だわ、この方が間違えたんじゃない！」
後の席から小太りの女が背をつついた。
「わたしのせいで？」
七重は後の女を避けて、体を前倒しにした。
「おかしいとは思ってたんだ。一番先に並んでた僕が、最後に乗る羽目になったんだから」
前の席の中年男が、犯人に手錠でも嵌めるように、七重の手を逆手に握ったまま離さない。何のつもりなのだろう？　声を上げたかったが目立つのだけは避けたかった。
バスは交差点で信号待ちをしている。ドアが開くと、乗客は先を争って降り始めた。

「チッ、チッ、チ」
舌打ちして、男が手を離した。きつく握られていた七重の手首に、紫色のブレスレットが生々しい。
遅れて七重が続こうとすると、脇に立っていた少女が倒れかかった。
見ると少女の顔は紅潮し汗が噴出している。体で支え額に手を触れた。大変な熱、病気に違いない。
でも七重は他人と拘ることに尻込みした。何も、わたしでなくても？　なら、誰が？
如何したら良いのか戸惑ってしまう。皆、争って降りていった。
七重が観念し少女の肩を抱え込んで、とにかく早くバスから降りようと踏み出した途端、今度は足の上にドサッとスポーツバッグが落ちた。目を上げると中学か高校生位の男の子が、通路に立ちはだかっている。これでは降りることも出来ない。
「どいて下さい。何をするの？」
当惑しているうちに、ドアは閉じバスは発車してしまう。乗客は少女と少年と七重だけになった。
「運転手さん！　病人なんです。酷い熱、どこか、病院の前に止めて下さい！」
七重は叫びながら、片手で少女を支え、片手で降車信号を押しつづけた。運転手はかすかに振向いた、帽子を目深に被っていて、表情は読み取れない。
「僕が交渉してきます」

少年が運転手の背後から体を寄せていく。ぴったりとしたジーンズの足が、スタンスを広く構え、何をしているのか、遠くもないのに掴めない。彼等二人が妙な密着の仕方で重なり合っている。冷え切っていた七重の体がスポンジのように少女の熱を吸い取っていく。

「何処に止める気かしら？」

少女が七重に縋っていた腕を弛めながら囁いた。僅かにカーブをつけて切り揃えた前髪の下で、熱を帯びた目が驚くほど大きい。中学一、二年だろうか？　人間になり切れない、動物の無垢な表情。

「取敢えず、僕達の家の近くで止めて貰うことにしました」

少年はそう告げると、終止符を打つように、ごくんと唾をのんだ。

「なあんだ、あなた達、ご兄妹でしたの？」

兄妹なら、何もわたしが面倒を見ることもなかったのだ。後悔しても遅い。兄は白目勝ち、青白い逆三角の顔に眼光は鋭いが、それを打ち消すように、天然らしい巻き毛が、顔を陽気に取り巻いている。

「あなたたちのお家って、どちらなんですか？」

七重の質問にそれが答えであるかのように、少女はぐったりと七重の肩に凭れかかった。流感だろうか？　ふと、見上げると、網棚に二人分のテニスのラケットが載っていた。日射病か？　熱中症？

アパートに帰ったからといって、誰が待っているわけでもない。時間は余り過ぎるほどある。この歳になって、急ぐことはないのだ。

少年がバッグの中から、ジュースの缶を二個取り出すと、栓を取って少女の手に握らせてから、もう一方を七重の鼻先に突き出した。七重は発熱したのが自分であるかのように喉が渇いていた。

ジュースが少女の口内に入り、白く長い若々しい喉を動かして降りて行くのを確めてから、七重はゆっくりとジュースの缶に口をつけた。気のせいか苦味が少し舌にのこった。

自分は何故こんな子供達に取り憑かれ、いい加減な運転手に身を任せているのか？　常々変化を渇望していたにしても……。ジュースが気持をひんやりさせる。目を落すと、ホテルの客室整備員として、疲労しきった四十歳近い女の足は、少女の足の二倍の太さにむくんでいた。

新しいチームリーダーの、あのべったりとした眼つきが気になった、勝手に恋されるのは困る、早めに払い除けなければ……。思いっ切り嫌な女になって振り切るのだ。振り切った途端、今度は苛めがやってくる。この気の遠くなるような反復、明日からなるべく目立たないようにするのだ。こんなことを、もう、何度経験したことか。その度に傲慢で嫌な女のイメージが定着していく。

しきりに少年が少女を気遣っている声はしたが、七重は眠くなっていた。とろけそうな程眠い。

「着きましたよ」

足元がよろよろしている七重を、運転手と少年が両脇から支えた。バス停の前には長い石垣の上、鬱蒼とした木々が浮き出していた。

七重は目覚めを怖れていた。生死どっちに目覚めるかは、時の運のような気がする。目の前が光と影のだんだらになった。体は子供の頃のように心地よさそうに温んでいる。

眠りを中断された記憶が戻って来る……が、夕べのことが思い出せない。

仰向けのまま枕の上で首を傾けた。七重の目が天井に突き当たる、綺麗に通った柾目、桧だろうか？首を回していくと、高級品らしい漆絵の調度が一方の壁面を占領し、一方には大きな格子の障子戸を通して葉影が揺れているのが見えた。

七重はベッドから跳びだし、障子をあけ、ガラス戸を繰った。苔むした石灯篭、生い茂った木々。葉ずれの音。

あわててベッドに戻ろうとすると、姿見の中で、クリーム色の寝巻姿が動いた。誰のものを着込んでいるのだろう。動くたびに鏡の中は、黄色のネグリジェ姿で一杯になった。

ホテルでもアパートでもなく……そうだ、まだ、あの家にいるのだ。バスから降りたあと、少年が主治医に電話をするといっていたが、七重が振り切って帰ろうとすると、少女が抱きついて離れなか

った。少女が眠ってから帰るつもりで、必死に睡魔と戦っていて……、その後の記憶がない。ネグリジェを剥ぎ取ると、バーゲンで買ったスリップが現われた。姿見の中、胸の膨らみのない少女とも老女とも見える痩せた体、薄幸そうな馴染みのない顔。

それにしても、ノイローゼの既往のある、わたしが、他人の家に泊まり込むほどの拘わりかたを、何故してしまったのだろう。相手が子供だとしても考えられないことだ。

「父は死に、母は何処かへ行ってしまいました」

年かさの少年がいった。

「こんな大きな家に、お二人で？」

会話の断片が夢の中のようにふわふわしている。

なら、早く帰らなければ……、世慣れない七重の体が微かに震えた。ベッドの脚下に、この部屋に相応しくない通勤用の薄汚れたバッグが投げ出されていた。はっとして、中を改める。全財産を入れているのだ。幸いなくなったものはない。

この部屋はあの兄妹の母親の寝室なのでは……。どこかに写真でもないかと見回してみたが、どこにもそれらしいものはない。七重は、とり急ぎベッドを整え、日頃の技術で自分の痕跡を消し、見る間に知らぬ顔にもどった。わたしは眠らなかった。そう、母親には、それでいい。

部屋全体は黒白のコントラストで纏められていた。対照的なルノアールの絵が明るく暖かい。小品だが、本物に見えた。

あの子たちの母親は、かわいい子供と家と貴重品を捨てて、どこに失踪してしまったのだろう。男と一緒に？　そうかもしれない。被害者は子供達、まだ保護者を必要とする年齢なのに……。でもほんとに家出をしたのかどうか、子供の言うことを真に受けてはいけない。

庭の向こうで、明るい笑い声が響いた。窓に近寄ると、庭木に水をやっているのか、朝の光に淡い七色が砕けていく。ノズルを持っているのは……夕べ病気だった少女。もう元気になったらしい。子供だから治癒が早いのだろうか？

「あら、お目覚めですか」

少女がホースを手にしたまま、庭から声をかけた。

「もう、ご気分よろしいんですか？」

七重は咎めるように言った。

「無理しては駄目ですよ！」

「はーい、大丈夫、ぴんぴんよ」少女は飛び跳ねてみせる。

何故、自分が泊まり込むことになったのか、問いただしたかったが、オーバーワークで疲労が溜ま

っていたのだ。疲労困憊、他人の家で眠り込んでしまった中年女に、当惑しきっている兄妹の姿が目に浮んで、恥ずかしくてやめた。

緑の庭を見通せる食堂での食事。彼等の希望でサンドイッチをつくった。二人はびっくりするほどはしゃいだ。掌をタッチさせては躍り上がる。見も知らぬ他人でも母親らしい者がいるだけで、これほどまでに、心を弾ませるものなのか？　その分、七重には子供達の孤独がわかるような気がした。

「このまま、わたしたちと一緒に、この家に住むっての、どうですかあ！」

少女が言った。

「まさか！　お母さまがお帰りになりますよ。その時、変な女がいたら、びっくりして腰を抜かしておしまいになるでしょう」

「香川さん、今アパートに住んでいるって、おっしゃいましたね。だったら、この家の部屋を借りてほしいな。僕達だけじゃ広すぎる、といって見ず知らずの人に貸すのでは、怖い気がするんです」

少年が体を前に乗り出していった。

「あら、わたしだって、あなた達にとっては、見ず知らずの人間でしょう！　それに、わたし、こちらのお部屋をお借り出来るほど、高給ではありませんよ。そんなことを無防備におっしゃって、悪い人間に居座られでもしたら、どうなさるの」

七重は嗜めるようにいった。両親から見放された兄妹の心もとなさが手にとるようだ。経済的にも困っているのかもしれない？

「今お住みのアパートと同じでいいんです。なんなら、家政婦の帰ったあとの家事を手伝って下さる条件で、部屋代を棒引きにしていただければ、僕らは満足。理想としては共同生活者！」

楽しい夢を語るように少年は熱をおびてくる。

家政婦が通って来るにしても、どうやって暮らしているのだろう。後見人はいないのだろうか？

「そこまで言って下さるのは有難いけど、わたしは長いこと気侭勝手にやって来ましたから、とてもとても……。それに、わたしは人間嫌い……」

七重は言いかけて口を閉じた。これは禁句なのだ。

「それでも、いいんです。考えて下さい！」

少年は、七重の言葉を受け流し、忍耐強くなる。七重は急いで髪を掻きあげた。坊ちゃん嬢ちゃんの思いつきに付き合う気はない。別れ際、改めて、少年と少女の顔をまじまじと見た。どちらもその眼力で、七重を引き止めたいような表情に見える。

でも、何故？　こともあろうに、わたしを？　日に日に七重の存在は稀薄になって行くばかりで、携帯電話さえ、かける相手も、懸ってくる相手もないのだから……。

七重は兄妹を振り切って歩き出した。
「工藤盟、十五歳。工藤美砂、十三歳。電話、××××、五四三二」
少女の声が暗号電報のように背後から、追い駆けてくる。

5　親を選ぶ権利

七重に親しそうに寄って来たアパートの管理人が、急に苛立った顔つきになった。
「香川さん、もうよろしいんですか。貴女昨日、睡眠薬自殺を計ったんですって？　いいのよ、隠すことないんですから。男の方から電話がありましたのよ。私の方としましても、貴女、自殺などされたら、ことですよ。こんなこと申し上げるのも意地悪な気もしないでは、ありませんけど、背に腹は換えられませんもの。自殺のあった部屋には当分、変わりの入居者がないんですよ。それで、ご相談ですけど、出て行って頂きたいんです」
「そんな、自殺、自殺って、わたしは、こうして生きているじゃありませんか。わたしは自殺など計

った覚えはない。間違いですよ！　男の方って、どなた？」
「バス会社からです。何でも、バスの中で自殺なんか計られて、迷惑だったんでしょうよ。その証拠に、珍しく外泊なさったじゃありませんか。病院で手当を受けてらしたんでしょう！」
管理人はしげしげと七重を見て、変声期の男の子のような声で付け加えた。
「あきれて、ものも言えないわ！」
こっちでいう言葉だ、本当に呆れてものもいえない。
「では昨日、何処にいらしたんです」
管理人は探偵のようにアリバイ探しにかかる。
「知人の家です」
「自殺は一度試みると、必ず二度三度と……。私、それが困ります」
「どうなっているんでしょう、ほんと、妙なお話。わたしは自殺する気になったことなど、ただの一度だってないわ。先がそんなに長いとは信じられませんもの。三年契約で、まだ半年は残っている筈。出て行くつもりはありませんよ。バスの中で病気になったのは、中学生の女の子で、その子を家まで送っていき、遅くなったので一泊したんですけど、何なら、電話で確めて下さい。電話は××××の５４３１」

正確な番号が言えたかどうか。
「だとしたら、証人を連れてらっしゃいな」
管理人の捲り上げた袖から、静脈が青く膨れて蛇のように巻きついている腕が見える。管理人の女は七重の息の根を止めるように言った。
「明日の午後六時頃まで、立ち退くこと。あなたが自殺しないかどうか、昼夜見張っていなければならないなんて、私出来ません。今晩自殺しないって約束して下さったとしても、私、おちおち眠れないでしょうよ」
七重はせめてもの抗議として大きな靴音を立てた。このアパートに長く居過ぎたような気がする。敷金や権利金が懐にこたえても、もう少し人間らしい住まいに移るべきかも知れない。住には人間を決定付ける何かがあるのだ。
「一昨日の午後五時三十分頃、駅前で乗客を乗せて発車させ、途中、回送車に変更させた運転手さんはどなたですか。調べてください。はい、そんなって！　事実なんですから……」
さすがの七重も腹立ちを押さえきれずにバス会社に電話していた。
「おまけに路線を変えたり、私がバスの中で自殺を計ったなどと、アパートの管理人に電話をして来たり、本当に迷惑しているんです。その運転手さんを探し出して下さい」

「はあ、なんですって、香川七重さん！　あなたが夕べ、バスの中で自殺を図ったなどとは、報告を受けていませんし、回送車に人を乗せるなんてあり得ません。まして、勝手に路線を変更することなど出来ないんですよ」

バス会社の男は狐に抓まれたような声を出した。

「違います、病気になったのは、工藤美砂という女の子で、わたしではありません」

「まあ、調べてはみますが、なんか、勘違いでもしていらっしゃるのでは？　いや、少し待っていて下さい。調べるだけは、調べますから……」

中々電話はかかって来ない。運転手が出たら、管理人に電話をして、誤りを訂正してくれるよう、頼むつもりだったのに……、結局、バス会社の男は、調べる気も、返事をする気もなかったのだ。

バス会社には完全に無視されたのだ。もう一度、電話をかける気にはなれなかった。あと、証人になってくれそうなのは、あの二人しかいないことになる。七重はためらった後、電話番号を叩いた。

「あら、そんなお電話来ていません。わたしたち証言するわ、明日でいいんですか？　行くわ。参ります。ねえ、お兄さま、二人で行きます」

電話の向こうで美砂の声が明るい。救われたのだ。

七重は工藤兄妹との約束の時間まで、外で苦労して時間をつぶし、帰ると管理人室の前を素通りして部屋迄一気に駆け抜けた。ドアを開けると心臓が跳び上がった、家具が何一つなくなっている。慌てて管理人室に走った。何かの罠に落ちているのだ。驚いたことに、管理人は別人のように愛想が良くなっていた。

「工藤さんが、運送屋を手配して下さって、あなたのお荷物たった今運び出したところですよ」

「工藤さんが？」

「そうです。如何にも育ちのいいご兄妹ですね。工藤さんて、あの旧家の、工藤様のことでしょう。昔はこのあたり一帯の大地主だったんですよ。先代辺りまで貿易商をされていたんです。戦争でお子様が皆、戦死されて、遠縁の方が、養子に入られたとか、聞いたことがありましたよ。あなたに、あんなご親戚があっただなんて、知りませんでしたわ」

厄介払いをして嬉しそうな管理人に、抗議のために挙げた七重の右手が、別の希望を拾ったように左手と合わさる。美砂が七重の部屋に入っていくのが見えたのだ、七重は急いで部屋に引き返した。

「こんなことをして欲しいと、わたし、あなた達に頼んだかしら？　わたしは只、証人になって欲しいと……」

七重は言いかけてから、口うるさい婆に見える危険を意識して、口を一文字に閉じつけた。

「だってえ！　管理人さんが出て行って欲しいって……。それにあの女は帰らないわ！」
美砂は七重の心配を察したように言った。
母親をあの女……。七重はぎょっとして、その花の蕾のような唇を見つめた。
「わたし達、香川さんの他に気に入った人も、頼れる人もいないんです」
その言葉には、七重の間の悪さをカバーし、聞くものの胸を揺さぶる、いじらしさがあって、七重にはさっきと同じ口から出た言葉とは信じられない。運び去られた荷物を追って、子供のいいなりに他人の家に入り込むなど分別のある大人として、許されることではないが、七重は何故か工藤家に入り込みたい誘惑を感じていた。
この歳になっては非常識も矛盾も、どれほどのものでもないのかも知れない。
工藤家の前で、盟が盛んに手を振っているのが見えた。
「ママ！　ママ！」
手を振っているのは母親に対してで、七重ではなかったのだ。ギクッとして身を引き、あたりを見まわした、それらしい姿は何処にもない。この子達の母親は四十歳にはなっているだろう、七重は三十九歳、三十代、せいぜい姉か、叔母さんにして貰わないと割が合わない気がする。不満とためらいで、足の運びがぎくしゃくした。

「びっくりしました？　そんなに？」
盟が心外そうに頬を膨らませる。
「お母さまが恋しくなったから、こんな真似をしてみたくなるのね、あたり……」
七重が言い終わらないうちに、ぐっと堪えていた尻上がりの笑い声が七重の語尾を掻き消した。
「何を考えてるんですかあ、お袋のこと？　僕も美砂も、あいつのことは大嫌いなんです、だから捨てたんだ！」
今度は盟で、母親を捨てたときた。この年頃の子供の、肉親に対する屈折した愛情の表現なのだろうか。口で言うことで、腹のなかなど量り切れない。
「この部屋、ちょっとダサイけど、でも、気に入りました？」
良い返事を期待している二人の顔、十二畳程の部屋の中で七重の引越し荷物が場違いに蒼ざめていた。部屋の隅には今までこの部屋に置かれていたらしい調度が山積みされている。
「必要なものがあったらお使いになって下さい。あとは物置に突っ込んでしまいますから」
盟がてきぱきと、やり手の大人のようにいった。
「本当のところ、わたしは怒っているのよ。自分の物に他人が勝手に手を触れるだけでも、我慢出来ないのに……。全く、途方にくれるわ、困った人達ね。ああ、そうだ、それでは、明日までこの荷物

預かっておいて！　わたし帰りますから」
　といっても、アパートには帰れない、どこか安宿を見つけなければ……。家族旅行以外で、ホテルに泊まるなんて始めてだ。独りで泊まるのは心細い、歩いても歩いても、ホテルが予約で満杯だったら……。でも、兎に角、ここを出なければならないのだ。それだけははっきりしていた。
「僕達心細いんです。夜なんか木が多いから色んな怪しい音が忍び寄るんです」
「そうかもしれないけど……」
「もしも、香川さんの荷物を誰かが盗んでいったら？　僕等なんていって謝ったらいいかわからないもの」
　盟が長い腕をぶらぶらさせていった。
「いいのよ、大したものないんだから」
　七重が切捨てるようにいった。
「嫌だあ！　持って行けって言ったのは、管理人のおばさんよ。わたし達、悪いことなんてしていないと思うけど？」
　美砂が反撃に出た。この子達に、自殺など企てたりしていなかったと、証言を頼んだのは七重自身なのだ。証言しようとアパートに来て、兄妹が管理人に丸め込まれた？

「ああ、ごめんなさい。悪いのはわたしの方だったわ」
七重が気落ちすると、
「僕達、香川さんのこと、絶対に帰さないから……」
盟が七重の命より大切な全財産入りのバッグを奪い取ると美砂に手渡し、美砂はそれを持って何処かに素っ飛んでいった。
宿無しのふがいなさ、七重はきょときょとしながら荷物の配置をきめた。泊まった部屋の反対側にこの部屋はあるのか、前には見えなかった花壇が見えている。荷物を入れても、がらんとしている空間に運送屋がこの家のテーブルや、椅子を並べた。
「あなた達、管理人に脅迫されたのでしょう。誤らなければならないのは、わたしの方なのに、腹をたてたりしてごめんなさいね。……厚かましいと思うけど部屋を探すまで、泊めて戴いていいかしら」
七重は恥ずかしさに顔が紅潮していくのが分った。少年と少女を手玉にとっているのは、多分自分なのだ。
「さっき他人だとおっしゃいましたけど、香川さんのことをママだと思って暮らすことに決めたんです」
美砂が歌うように言った。

「あの女は帰って来ない、だからリラックスしていいんですよ。僕達、香川さんを母親に決めました」
盟も同調した。
「そんな乱暴な……」
いくら捨てて出て行ったにしても、母親に不信感を持っているにしても、がさつな表現は許せない。だが自分にその意志がないといったら？　直ぐ出て行けと言われかねない。相手は子供なのだから、沢山の爆弾を抱えているのだ。
「腹いせに妙なことをしてみたい気持も、分らないではないけれど……」
「よく考えた上で、あなたを母親に選んだんです。夕べ、テストも終わりました」
「テストですって？」
「僕達、あなたに母親の理想像をみたんです」
「何をテストして知ったとおっしゃるの？　わたしが母親の理想像だなんてあきれて物も言えない」
「香川さんのことなら、何でも知っているんですよ」
「うそ！　なんなら、その理想像というのを話して下さらない。一つ一つ項目を挙げてくれれば、わたしがどんなに相応しくないかを説明できると思います」
「その必要はないな。選んだのは僕達だもの」

何かの期待で光る二人の目。彼等は人間に与えられていない権利を行使する先駆者のつもりでいるのだ。親を選ぶ権利。

「もしお嫌でなかったら、お母様のことを少し詳しく話して下さい」

何かあるのだ。七重はそれを探り出す為に方向転換をした。

「父のことも、もとはと言えば、あの女なんです。父は亡くなりましたけど、自殺だったんです。あの女さえ馬鹿なことをしていなければ、父は生きていた筈です」

「わたしパパが大好きだったのに……」

美砂がしゃくりあげ、盟はいたわるように美砂の頭を撫でた。

「父の死後、あの女に愛想をつかした家政婦が出て行ってしまい、親戚や友人にも見放されて、僕等何時も二人っきりでした。あの女は愛人にも見捨てられると、父が亡くなったのは僕が原因だと責め、ついには僕が母を殺そうとしていると騒ぎ立てました。被害妄想なんです。挙句に一家心中しようだなんて言いだして、美砂を怯えさせました。けど、ラッキーなことに、あの女は出て行きました。ですから探そうなんて思わないんです」

母親に対する怒りのせいだろうか、盟は吐き出すように話し、何度か暗い庭に向かって敵意に満ちた瞳をこらした。

「ほんとうの母というのは、あなたのような方だと、わかっているわ」
美砂が天使の声で言った。七重は降ってわいた母親という言葉の洪水に、溺死しそうになる。今まで自分自身を、母親というものの対極に位置付けてきた。結婚もしない、子供も産まない女、自分自身が生きるために働く女。どうしてわたしが、母親にならなければならないの。わたしは子供が欲しいなんて、思ったこともない。わたしは自分の存在に照らして、母親には絶対になりたくはなかったのだ。
世間並みの家庭に羨望を抱いたこともない。この二人は単純に、孤独な女はママになりたがっていると勘違いしているのだ。
「僕等、あなたがいて下さるから、心を入れ替えて、また学校に行くつもりです」
「というと、いま休んでいらっしゃるわけ？」
「ええ、一月ばかり」
「でも中学三年は大切な時なんでしょう」
「ええ多分」
「それで、実質的には、わたしに何をしてほしいの、家政婦？」
子供だって打算はあるのだ。美砂は困ってか爪を噛んだ。人差し指の爪が気のせいか薄くみえた。

「言っておきますけど、あなた方にどのように、哀れに思われようと、わたしはホテルの客室整備のお仕事をやめる気はないわ」
接客がないこと、自分の責任で仕事が出来ること、それは七重にとって必須条件なのだ。
「ええ、ここにいて下さるだけで心強いんです。あんなアパートに居るべき方ではないのに……」
盟は言って無意識に誇りの感情をむきだしにした。
「お互いの過去に深入りしない。後はほんの少し、しっかりやれとか、どうしたのとか、声を掛け合う。こういう同居条件で如何ですか？　あ、それから、奥の土蔵には近付かないこと。あの辺り、蛇がいるんですよ」
盟は彼なりに吟味したらしい条件を出して、照れくさそうに笑った。
「よろしいでしょう」
七重は異体のしれない雰囲気の虜になって、頷いた。何でも良かった、ほんの暫くの遊びに過ぎないのだから。盟と美砂の二人は満足感を全身で現わして、それぞれの部屋に引き上げて行った。
七重はベッドに倒れ込んだ。アパートの部屋が、遠い遠いところに思われた。世界中がおかしくなっているのだ、あの運転手も、アパートの管理人も、それに工藤兄妹、その母親。見回すと、自分の家具と、工藤家の上等な家具、ちぐはぐだが、それなりにところを得て、居心地よく収まりかえって

いた。アイボリーの絨毯の上に、丸めた紙屑。掬って皺を伸ばした。癖のある、丸文字。

同居者条件

1　子供に対して適切なアドバイスが出来る。
2　子供に対して要求しない。
3　子供を保護する。
4　一緒にいて楽しい。又は、不快ではない。
5　浪費家でない。
6　慾がない。

これが、あの兄妹の、同居者を選ぶ条件だったのだろうか？　それとも、母親を？　世間の大人たちに知られずに、美しい兄妹の母親になる遊びは、それなりに楽しい気もする。自分だけ若いつもりでも、二人を連れて歩けば幸福な親子に見えるのかもしれない。この子達に自分なりのアドバイスをして上げられるだろう。……しかし、遊びなどという気楽なことですむのかどうか？　しっかり、握り緊められていたらしいメモ用紙の皺。これが、私に対するテストだったのだ。

それにしても……、浪費家でない。慾がない。七重はベッドの上で身を捩って笑った。

6　秘密の匂い！

子供達や、部屋や、家が、七重になじみ住み慣れた気分になる。あれから三日過ぎていた。銀行口座を近くに移す為、勤めを休んだ。

「香川七重ですが、子供が病気の為、病院に連れて行かなければなりませんので休暇をいただきます」

七重は電話に向かって早口になる。

「半日ですか？　一日も？　何の為に？　ええっ、嘘？　お子さんがいただなんて？　そんな引継ぎは前任者から、受けていませんよ！　あなた、結婚してもいないのに、どうして、お子さんがいるんです？　隠し子ですか？　それは、ないな、ない。今まで、皆勤で表彰を受け続けて来たんでしょう！戸籍抄本にだって、そんな記載はありませんでしたよ？　嘘を言っても駄目です。僕は香川さんのことなら、何もかも調査ずみです。何でって、七重さんが好きだからですよ。迷惑だなんて、そんなこと……。あなたが来ないと、僕、仕事が手につかないんです。本当です。明日は必ず出勤して下さい。待っていますから……」

チームリーダーが、執拗に喋り捲る。七重は黙って電話を切った。これでは、勤務先を代えなければならなくなる。一気に、邪魔者の切り捨てを目指したつもりの心理作戦が、ぎくしゃくしていた。子供が病気だと言ったのが裏目にでたのだ。策を弄しすぎたのかも知れない、それにしても戸籍抄本まで調べているとは？

七重は身震いした。こういうのが一番嫌！　もはや、我慢の限界を超えているのだ、この男には二度と会いたくなかった。同僚の女達も、仲間の間で、際限もない苛めを繰り返していた。母親がこれでは、学校に行っている子供達の間で、苛めが絶えることなどあり得ないこと。人間の性悪説が信じられる。あそこには、絶望と恥がひそんでいるのだ。できる事なら何とか脱出したかった。もしかしたら、チャンスは来ているのかも……。七重は首を振った。この家にいることと、わたしの運命には関りはないのだから……。

安心したのか、子供達は昨日から学校へ通い出した。盟は午後になると家政婦がくると言っていた、と言うことは、午前中は誰もいないことになる。この明治、大正時代に建築されたらしい、町屋造りのT字型の細長い建物は、その物珍しさで七重の好奇心を駆り立てた。七重は大通りから、旧家の探索を始める、この時を待っていたのだ。

大通りから、縦格子の戸を開けると、一間巾の土間がこの家を縦に貫通しているのが見える。この

家の一階に、廊下も、縁側も無いのが不思議だったが、長い土間の通路が、廊下の代りをしているのかもしれない。先代までこの通路を使って、外国から貴重な商品や資材が、車で蔵の中へ運び込まれたり、運び出されて行ったのだろう。

玄関の格子戸の右側は応接間で、道路に開かれた格子戸が続き、左側は土蔵つくりの白壁、続く青銅葺きの高い塀は緑青で覆われ、黒く変色した金メッキの工藤貿易のプレートが埋め込まれていた。七重は溜息をつき、呼吸を整えてから、足を踏み出した。通路の右手には、応接間に続いて、居間と、仏間と副室があり、副室はサンルームのように、石庭に開かれていた。石庭には、池と噴水や、石灯篭が巧妙に配され、とりどりの色をした、姉様とんぼが儚そうに飛び交っていた。応接間の絨毯はペルシャ絨毯、金色の仏壇は壁一杯の大きさ。七重が溜息をついて、通路の左手に戻ると、昔、帳場か、事務室だったのだろうか？　玄関から見渡せる細長い土間には、机が七個並び、事務所の入り口には腰の高さに、西部劇まがいの、籐の両開きの扉がきしんでいた。その向こう、事務室のガラス戸越しには、青々とした芝生の庭が広がり、誘われるように七重は庭に出た。見上げると、杏の大木が屋根を覆い、杏の実が青銅葺の屋根を掠めて、たわわに実っているのが見えた。その色の対比が、はっとするほど美しい。でも、杏のある家は不幸になると、誰かに聞いたことがあったような気がして、何となく胸が痛くなった。

七重は急ぎ通路に戻った。前庭に続く左手は、大きな部屋が三、四個並び、その後、広い板場には、白い内蔵の扉が、重々しく開かれていた。七重の部屋は、板場の次、内蔵の脇で、リビングやダイニングキッチンに続き、どの部屋も裏庭に面している。両側にある商家の裏に食い込んでT字型に翼を広げているのだ。板場は作業場だったのだろうか、二階の回廊から監視できるしかけだ。この二階に子供達は個室を持っていた。裏庭は鬱蒼とした木々に縁取られ、二つの蔵の白が見え隠れし、突き当たりには高い土堤が続いていた。その後に何も見えないのは、多分、川が流れているのだ。水害でもあって、土堤はその後で造られたのかもしれない？　昔は川から、船や筏で荷物が送り込まれ、奥の二つの蔵はそれなりの役目を果たしていた、そう考えるのが自然な気がする。

ゆっくり、裏庭を散策していると、七重は救われた想いになる。何時建築されたものなのか、黒いトタン葺きの厨は別棟になっていた。両養子に入ったという盟の父母は、この古風な家を護り、二部屋をリビングとダイニングキッチンに改装したに過ぎないようだ。それが不自然にも、当然なことにも思えてくる。職場で舞い上がる寝具の埃や、煙草の吸殻、人間の体臭や残り香に埋もれていると、こんな屋敷にいて、古い住人を夢見、静かに夢想して暮らしたくもなる。

ふとみると、右手バス通りに面した石垣の上、庭木の間から、帽子を被った中年男が覗き込んでいるのが見えた。男は庭の中に丹頂鶴のような首を、ぐいっと突き出した。七重は反動のように逃げ始

める。どうしても、逃げる、逃げ捲くる。振り返ると、鶴男も見られたと思ったのか、どこへともなく消え失せていた。

背丈ほどもある薔薇が、徒枝を突き出して咲き乱れていた。この匂い！　七重の生家にもこの香りが溢れていた。教室を飾るために薔薇の花を毎日切り取ってくれた母の白い手、あの鋏の音。心を込めた手作りの服。父が手ほどきしてくれたヴァイオリンのレッスン。あの頃の少女は、今うらぶれて、他人の家の同居人として薔薇の庭を見ている。

自分の一生を台無しにしたのは、きっかけはどうであれ、七重自身の弱さによるものだと、今では納得していた。過去は鍵の掛かった小部屋の中、鳴りを潜めて鎮まっていた。

奥の土蔵のあたりに木漏れ陽がこぼれ、誰が壊したのか壜のかけらが堆く集められていた。陽光がその上に当って、サファイア色に輝く。七重が腰を屈めて輝きに手を延ばすと、突然、硬質な衝撃ときらめき。息を詰めると、手の甲に、壜のかけらが突き刺さり、白いブラウスに扇型を描いて血液が飛び散っていた。傷口から、かけらを取り除き、ハンカチを押し当てる。ハンカチは見る間に血を吸い込んで重くなった。痛みは不思議に遅れてくる。

見回しても、どこから飛んで来たのか分らない。奥の土蔵に近付かないこと、そんな同居条件がついていたことを七重は思い出した。盟や美砂が見ていたのではと、呼んでみるが返事はない。

土蔵の上の方にある鉄格子の内側は、光線の具合か真暗で人の気配は感じられなかった。裏庭の北東寄りに並んで立っている、この二つの土蔵は鬱蒼と繁った木々に遮られて、屋敷の外からはその姿を完全に隠していた。そういえば、さっき覗いていた鶴のような男がいた。何時かどこかで見かけたような気もする……石垣から覗くときの首の出し具合、その青い髭剃りあと。七重は思わず声をあげた。気違いバスの運転手だ！　まだこのあたりに潜んで、こんなところに住み込んでいる女に嫌がらせをしたのだろうか？

七重は探検を中止し、追われるように、部屋に戻った。

「わたしを狙って、誰かがガラス欠けを、投げつけたような気がしたんだけど……」

七重が言うと、

「あのあたりは、繁みだからさ、何が隠れてるか分らないんだ。あっちには行かないようにって、あんなに言っておいたでしょう！」

学校から帰った盟は、暗緑色の向こうを透かし見ながら言った。美砂が盟の足を思い切り踏みつけるのを七重は見た。

「土蔵の窓が開いていたけど、物騒ね」

「内格子があるんですよ」
彼等の持っているある種の感じ……？　この話題を早くやり過ごそうとする意図はなんだろうか？
夜、七重は微かにドアが叩かれたような気がして目を覚ました。
足音が階段を上がったり、降りたりしているのがわかった。ガウンを掴み、板場に出ると、冷気が眠気を払った。これ以上不幸になることはないのだから、安心するのよ。父母も、恋人も、財産も家も、若さも、正当な借間さえない、大切なものは全部失ってしまっていた。それは死に対する恐怖がなくなったことを意味しているのかもしれなかった。
影が、素早く部屋部屋を通り抜けて行く。その後ろで襖がつぎつぎ閉じる。昼間の怪しい男のことが気にかかった。それとも……？　足音が遠くなった男女の区別はつかない。七重は表戸を開けて外に出てみた。影はどこに消えたのか判断できない。子供の母親が帰って来て、七重の存在に気付いた？　母親なら引き返すことはない。昼間ガラスかけを投げたのは誰だったのだろう？　覗いていた鶴男なら、どんな凶暴性を持っていて、どんな攻撃を仕掛けて来るか、油断出来ない。
ベッドに戻り枕の中央に頭を沈め、毛布を引っ張り上げると、七重のベッドは生首一つ置いて平らになった。

7　父兄面接

朝、目を擦りながら盟が現われる。パジャマの前のボタンをはずして、素肌の胸を外気に晒している。七重は急いで目をそらした。

「盟さん、よく眠れて？」

七重は犯人探しにかかった。

「ああ、どうやらのう」

盟は老人のように答える。

「鶏がら！」

現われるなり美砂は叫び、オーバーに目を覆って見せる。盟が席に坐ると隣から整髪したばかりの兄の頭をくしゃくしゃにした。

十三歳の少女と、十五歳の少年と、三十九歳の女、三十九歳がちょっとたしなめたりしたら、母親になってしまいそうな微妙な立場だ。母親の代行だけは願い下げだ。どんなことがあっても……。

コーヒーカップに触れる形の良い唇、反り返って、鼻と顎の線がゆっくり動く。七重はかって何処かで美砂に出会ったことがあった気がする。

盟は空になったカップを両手で包み込んでいたが、

「ママ」

と掠れた声を出した。

「学校で父兄の面接があるんだけど、出て下さい！　進路決定の相談で、必ず出て欲しいと先生が言ったんです」

ママと呼ぶのだけは厳禁と言ってあるのに、盟は完全にそれを無視している。

「わたしのところも同じ日よ。同じ中学ですもの」

わたしが父母会に行くの？　行かなければならないわけ？　何故、そこまで？　七重の体が硬直していく。わたしは未だに拘っているのだろうか？　超越したつもりだった過去が、こんな時に七重をたじろがせる。心の動揺を勘ずかせてはならないのだ、両手で目を圧迫し息を整えた。こうしていても、二人の視線が痛い。

「それは、お母様でなければ……。お母様のいらっしゃりそうなところを、捜しましょう。いい機会ですもの。本気になって捜せば……！」

七重が懸命に言った。
「手は尽した。そう言っているのに……」
盟が憮然として顔を背ける。今更、尻込みなど出来る筈もない。内心どんなに怖気ついていても、平然としていなければ……。わたしは卒業したのだ。
「わかりました、ただし、お母様の代理だと名乗りますよ。それでよろしかたら……」
こんなことをいって、もう、引っ込みはつかない。
七重は目を凝らして、退場の機会を窺っていた。あと、何日？
夜、七重が警戒して耳を澄ますと、誰かが熱い息をひそめて、ドアに向かって立っているような気がした。でも、人間その気になれば、何時でも、どんな幽霊も呼び寄せられるのかもしれない。
母親の代理、叔母とでも名乗るつもりだったのに、美砂の担任だという女教師は、新任で母親に面識がないのか、いきなり七重に向かって立て続けに捲くし立てた。
「工藤さんのご家庭では、お子様にどんな性教育をなさっておいでなのでしょう？　美砂さんは家庭科の時間に、何故生理は自分の意志でコントロール出来ないのか、今迄、そうした努力をした女性はいなかったのかと、質問したんです。不可能だと説明すると、四十年も……、何だか先が真っ暗になるような気がするといって、茫然とした挙句、わたしは生理をおしっこのように、自分の力でコント

ロール出来る、一番目の女性になると宣言したんですよ。おくてでいらっしゃるにしても、情報は溢れているのですもの、美砂さん位の年齢になれば、皆な、覚悟のようなものは出来、それを、女の幸福とも感じることが出来ますのに。勿論、成績は抜群です。でも、成績さえ良ければ良いと言う、お考えでは、人間をいびつにすると思いますが……」

「はあ、然し……。でも、あの……わたし、聞いたことがあるんですけど……何と言うか」

七重の声が痰に絡まれてくぐもっている。

「何を聞いたっておっしゃるんですか？　美砂さんに聞いたっておっしゃるんですか？」

担任の女教師は、座高を高くして畳み掛ける。

「いいえ、そうでは無くって、先人は既にいたって、聞いたことあります。残念ながら、美砂さんは一番にはなれないようです」

喉のあたりで声がしわがれてしまう。

「何を、おっしゃってるんです？　あの子は、美砂さんは、一番です。ずば抜けた、ぶっちぎりの一番なんです。それは、今までも、これからも変りませんよ」

「いいえ、成績のことではなくって、先生のおっしゃった、生理の事です。昔の女性は、凄かったんです。自分の意志の力で、筋肉を鍛えたのでしょうか？　本当に調節していた人が、いたらしいです」

七重は受け売りをする。
「はあ……。昔の人がですか？　まあ、着物で、パンツも穿いていなかったのでしょうから……、T字帯位では、そそうしてしまったでしょうもの？　はあ、そうなんですか？」
担任の教師は、七重に機先を制されて、驚きを隠そうともしない。
「そうですかあ、そうでしょうね。タンポン位なら、昔の人でも考えついたかもしれませんけど……。はあ、目の覚める思いですわ！」
「ええ、人間、そう進歩しては、いないのではないでしょうか？」
七重は思いがけない成り行きに、終止符を打ちに懸る。
「そうなんですか、ほう、そう、そうなんだ。昔の人は、凄いですねえ！」
担任が繰り返している間に、美砂に振り当てられた面接時間は終り、次の父兄が入ってきた。あの美しい少女に、学校でそんな発言をする過激な面があるとは？　七重も女だから、美砂の心情は分る気がした。そのころの自分を重ね合わせると、いじらしいような懐かしさが戻って来る。
美砂の面接が終って、七重は盟の教室に急いだ。こんなことをしている自分が信じられなかった。戸惑いはあっても、精神状態は比較的安定しているような気がした。年月が七重を鍛えたのだろうか？
学校に怖気つく時代は過ぎたのだ。父母の死で、自分の死を恐れなくなったことが、精神の安定感

を生んだような気もする。それに、わたしは代理にすぎないのだから……。
盟の担任教師は、驚いたように七重を見た。
「盟のお母さんが欠席だとは？　考えられませんな。ご病気ですか？　お父さんが亡くなられて、間もないと言うのに……。盟の上に何かあったのではないかと、ずーっと、心配していたんですよ」
七重が答に困っていると、
「模擬試験の結果発表の翌日から欠席しましてね。周りの生徒に聞いたところでは、いじめや、喧嘩が原因なので、学会に出張するところだという工藤教授に連絡をとったんです。教授はよく調査した上で、盟には納得するように話すと、そう約束して下さいました。それなのに、三日後、亡くなられました。盟くんの休みが長期になって……でも最近明るい顔で登校するようにはなったんですが、すっかり意欲を失っているようです。これでは、受験校の決定がとても難しくなりますよ。どうなさるおつもりなんです？」
そんなことを、七重が答えられる筈もない。
「父親が亡くなり、母親も病気では、受験期の子供に対しては酷ですね。人の親なら自殺をするにしても、病気をするにしても、受験の影響の少ない時期を選んであげなければなりませんよ。さよう、今でも、受験戦争は凄まじいものです。何らかの反抗心から勉強しなくなったのであれば、なんとか

早く矯正しなければなりませんが、お心当りはありませんか？　悪い友達、ガールフレンド……」
痩せて毛深い顔の教師は、額に毛虫の眉をうねらせる。
「先生は、どんな進路をとるのが、盟さんにとって、一番よろしいと？　」
七重は質問から逃れるように問い返した。
「今は、大學に入るよりも、有名高校に入る方が難しいんです。年内には受験校を最終決定しなければなりません。それなのに、本人も、保護者も何を考えているのか、全く解らんのです。貴女、教師が志望校を決定出来るわけがないでしょう？　私に出来るのは、偏差値から見ての、合格の可能性を、判断することくらいですが、それでいいんですか？　代理の分際で、そんな無責任なことを言わないで下さい！　そうだ、責任といえば、あの日、工藤教授に電話で、母親の過去の話で、盟が苛めを受け、喧嘩をした話をしました。教授は、親の責任として息子が納得出来るように話すと、約束して下さいました。だが、苛めを押さえられない担任の責任の方はどうなんだと、おっしゃって……。ああ、全部ご存じなんでしょうか？　その翌翌日、自殺されたんです。だからずっと、気になっていました……、その後も……」
教師の目が七重に、纏いついて離れない。その目は、盟と七重との関係を探り回っているのだ。
「わたしには、その母親の過去とかいうものが、どういうものなのか全く解りません。教えていただ

けませんか」
七重が活路を求めるようにいった。
「教えて頂ければ、わたしにも、進路のアドバイスが出来ると思いますので……」
「母親の代理など、他人に勤まるものじゃありませんよ。おたくにはそれがわからんのですか？　あなたが、盟の母親の過去を知ってどうなるんです？　関係ないでしょうが！」
教師は七重のうさんくささを嗅ぎとったように、語気荒くなった。何を勘ぐっているのか、心が重い。この教師は一方的で、聞く耳など持たないのだ。こちらも話すこともない。盟は塾に行くのを止めている、家庭教師も断ったと言っていた、受験勉強もしているようには、とても見えない。彼の中で結論は既に出ているのかも知れないのだ。大学受験でも、構わないのでは、と、七重は思った。焦ることはないのだから……。
帰りに不動産屋を何箇所か見た。一時的にでも工藤家にいる七重には、どこも安普請で個性が無く、惨めに思われたが、最後の不動産屋でアパートを契約した、つまり何処でも良かったのだ。

8　告白

七重はドアに手をかけた。勉強机に向かっていた盟は、目に巻き毛がまつわりついて、不意を襲われた動物の顔だ。盟の顔色が赤紫になり、見る間に青くなった。不安とも、怒りとも、嫌悪とも、愛とも判断できない。彼は十五歳でも背が高く、男を意識させる。この子を前にすると心が騒ぐのは何故だろう、七重はドアを開けたままにした。

「今日、先生に、盟さんの部屋をみるように勧められたのよ」

「わかってるさ、成績の落ちた原因を探せってわけだろう？　あいつ他に何か言ってましたか。原因について……」

盟は気懸かりを口にして七重を上目遣いに見た。

「何か、お友だちと喧嘩したとか……」

「先公、そんなこと言ったんですかあ！」

「何があったの？　それが聞きたいと思って……」

七重は声を押えて言った。

「ママに関係ないんだから、気にすることはありませんよ。僕自身の問題なんですから」

「それはそうでしょうけど、わたしも昔のことを思い出していたんですよ。世代は違っても受験戦争はありましたし、やはり受験期の子供達は異常としか言いようがありませんでしたわ」
盟が痛みを共にしているように七重を見た。
「優しいのね。でも優しさは、受験戦争を勝ち抜いていく為には、向かないかもしれない」
「それは違う、僕、優しくなんかない、怖い人間なんです！」
盟は否定し、むきになって言った。
「おお怖い！　せいぜい気をつけなくっちゃ」
七重は笑い声を上げた。
「先生はあなたではなく大人の責任を問題にしていらっしゃったわ。かって、わたしにもそんな経験がありましたよ。わたしにあなたの力になれることがあったら、言ってみてくれるかしら……」
「ママには、殺したいほど憎らしい人はいないの？」
盟が挑むようにいった。傷ついているのだ。
「誰だって殺したい程憎らしい人の、一人や二人はいるのよ」
七重が答えると、盟は満足そうにVサインを出した。
軽率な言葉だったかもしれない、苛めに遭ったというのだから、盟や美砂のために何かしてあげた

い、そんな思いが湧きあがるのが不思議だった。七重は、始めて人間らしい関係を回復したような気がした。
「どうしたいの、これからのことだけど……」
七重は核心に触れた。
「如何したいかだって！　そんなことくらい分っているさ！」
盟は立ち上がると、部屋のドアを足蹴にした。七重はその激しさに震え上がる。他人の私生活に入り込み過ぎた甘さが、骨身に堪えた。
盟の投げた枕が七重の顔に当って落ちた。開けておいた扉が、背後で音を立てて閉まった。
「僕がどんな思いで、毎晩、何回も、あなたの部屋の前に立っていたか？　僕が喉もとにつかえて言えないでいる言葉を、あなたは全く推理出来ないのですか？」
「……」
七重は息を呑んだ。受験期に女は危険だ、担任教師の言葉が、このときになって耳の中に甦って来る。
「僕はもう駄目さ、気が狂うかもしれない。僕の口からそんな言葉を、本当に聞きたいのか？　どうなんだよう！」

七重は盟に圧倒されて後退した。
「あなたは僕が嫌いなんだ。だから、僕から逃げることだけを考えている！」
たかが中学生じゃないか、七重は落着こうとした。なのに顔が赤くなっていくのが分った。わたしがずるずる此処に残ったのは、盟に惹かれていたからかもしれない。彼の手が肩にかかった。
「僕は、お父さんを殺したんだ！」
嘔吐でもするように吐き出した言葉は、一瞬宙に迷って聞こえなくなった。盟は身を投げ出すように七重にむしゃぶりついた。猛々しい抱擁に、肋骨が軋んで、胸が痛くなった。
「ほんとだ！　本当なんだよう！」
盟の涙が七重の頬を濡らした。告白したがっていたのだ。
「どうして……」
「どうしてって、あの女を脅そうと思って買ったナイフで、ついパパを殺してしまったんだ」
「……でも……それを知っている人は？」
「ああ、あなただけだよ」
盟は混乱しているのか、それなりの計算があるのか、七重の首筋から胸へ、顔を押し付けたままずり落ちていった。熱い息遣いが服を通して伝わってくる。

「さ、立ち上って！　元気をお出しなさい、忘れるのよ。わたしは誰にも言わない。それが本当なら、もっと詳しく話してごらんなさい」

盟は長い間、押し黙っていた。

「僕が殺したんだ！」

盟の言葉は悔恨の思いで掠れた。

突っ伏して泣きながら、拳で床を叩き続けた。母親は昔、誰を殺したというのだろう。そのあたり、霧がかかったように不鮮明だが、自分の言葉に興奮していく盟にそれを問うわけにはいかない。盟は泣き止むと、引出しから新聞の切り抜きを取り出してきて、七重の前に投げ出した。

「X大教授、狂気の自殺か？」

……五月九日午後八時頃、工藤栄介X大教授、四十四歳は同大研究室に於いて、自らの腹部をジャックナイフで刺したが死にきれず、救急車で同大学病院に収容され、午後九時、出血多量のため死亡した。大阪市に住む友人、脇田次郎氏の話しによると、午後七時三十分頃、工藤教授は同氏に電話を入れ、『これから自殺する、さようなら』と言った。脇田氏はまさかと思い『冗談いうなよ。こっちに来てるのか』と聞き返したが。うめきとも笑いともつかぬ声を残して電話は切れた。半信半疑で来阪した時、宿泊するホテルに当ってみたが、午前八時にチェック・アウトしていた。そこで教授の自宅

に電話をして事情を話した。教授の所在がわかり、救急車が手配されたのは八時半であった。教授が何を考え、遠くはなれた大阪の友人に電話をしたのか分っていない……

「パパが大阪に電話をした午後七時三十分というと、僕が刺してから三十分経っているんだ。パパは僕が家に辿り着く時間を稼ぐ為に、大阪の友人に電話をし、これから自殺すると仄めかしたに違いないんだ。パパは最期まで息子によって殺される死を恥じていた。友だちに電話をしたのもそれを否定する為だったんだ。救急車が到着した時、傷からはみ出した腸を首に何重にも巻きつけて、パパは華やいでいた。僕に刺された心の痛みからすれば、傷の痛みは感じられない程だったのかも知れない」

そういえば、妙な死に方をした学者のニュースを耳にしたことがあったが、七重はその名を忘れてしまっていた。あれが盟の父親で、自殺ではなく、こともあろうに盟が殺したのだとは……。ショックだったが、七重にしても自分の両親を殺したという思いに取り付かれる。七重が何時までも少女の頃のまま両親に負担をかけているうち、母は心労と過労から風邪をこじらせて死に、父はそれを追って自殺したのだ。何らかの形で、子供は親を殺して生きて行くのかもしれないのだから……。

「さあ、しっかりなさい！　くよくよしないこと。立ち上がりなさい！　パパはあなたを許しあなたを庇って下さったのよ。あなたが、パパを殺したのではないと、世間に証明して下さったのね」

盟が七重の肩にもたれかかる。

「助けて下さい、ね！　あなたはママなんだから、僕を救える。頼むから僕を許すと言って下さい！」
殺人をしたという少年は藁に縋るつもりで七重に縋りついた。勢い余って、二人はバランスを崩して盟のベッドの上に倒れ込んだ。七重が慌てふためいて、起き上がろうとした瞬間、ドアが乱暴に音を立てて開いた。
「わかったわ、誰もかも、不潔なんだから……もういい！　みんな死んじまえばいいんだ！」
美砂の金切り声が、泣きながらどこまでも逃げていった。七重は、ふと、美砂は初潮を見たのではないか？　と思った。
「馬鹿だなあ！　僕等のママじゃないか。美砂の奴、気を回しているんだ」
盟はまるで何ごともなかったように、七重を見て微笑した。
「お父さまは許して下さっています。わたし、黙っています。わたし、何も聞いていませんでした。永久に、このことを誰にも口にしません！……」
七重は盟の求める、免責欲求を満たそうと、必死になって繰り返していた。

9　対　決！

午後の光が揺らめき、樹や花の発する甘い香りが、工藤家の庭一杯に満ちていた。七重はホテルを早退してきたのだ。ゆっくりと、深呼吸をした。

今日、出勤すると、早速、マネージャーに呼び出された。昨日の休暇に関係あるのか？　配置換えだろうか？　それとも何か？　七重は不安そうにドアを叩いた。マネージャーは、七重を認めると、いきなり分厚い封筒を突きつけた。

「君、それを読んでご覧！」

マネージャーは、不快なものでも見るように、小指の先だけ使って、封筒を裏返しにした。そこには、管理部長、御中とあった。

「どうして、わたしが、これを？」

七重は、危険を察知したように逡巡した。

「どうしてって、これは、君の素行調査だそうだ。君はチームリーダーの村田と、親しい関係にあるのか？　作業中も目に余る行為が度重なり、チームの結束を乱して困り果てている、とあるんだ」

「そんなこと、嘘です。そんなこと絶対にありません。それは、チームのメンバーの、でっち上げで

す」

「そうかな？　君、彼とラブホテルに行ったんだろう？」

マネージャーの口角に嘲笑の皺が寄った。

「いいえ、行ったことなどありません。そんなこと、真っ赤な嘘です。あの人たち、何時もそんな苛めをして、楽しんでいるんですよ。第一わたしは、村田さんとまともに話したこともないんですから。あり得ないことです。そんなこと、投書したグループの人たちだって、百も承知の筈です」

七重は昂ぶる怒りを押えて低い声を出した。他人を刺しても、お相子なのだから……。

「ほら、見てご覧、字が切り張りしてある。すごいなあ、これ！　何でこんなことをするんだ？　パソコンでうったって解らないのに？　ああ、パソコンでは、読まずに捨てられる危険があるんだな。これなら、読むものをぎょっとさせられる。正解だな！」

マネージャーは中から便箋を取り出した。便箋の上には、大小さまざまな、活字が貼り付けられていた。彼女達はあのくたくたになりそうな、労働の間で、客の残していった週刊誌を切り刻んで、密告文を作成したのだ。何が目的なのだろう？

「多分、こいつら、これが最初ではないな。こういった手口で、今のパートの主婦は嫌がらせをするんだ。怖い話だなあ！」

マネージャーは、七重に向かって解説して見せた。
「ところで、さっき、村田を呼んで聞いて見たんだが、ラブホテルに行ったことは認めたぞ！　最も、本気だとは言っていたがな。　本気なら辞めさせられることはないと、たかを括っていた！」
マネージャーの目が光った。
「そんなことありません。あり得ません」
七重は繰り返した。一日休んだだけで、リーダーからも、メンバーからも、こんな卑劣な形で報復されるとは……。辞めたいと思いながら、これからの生活費のことを考えると、一歩前に踏み出せず、逡巡してしまう自分が情けなかった。
「まあ、余り、浮き上がらないように、するんだな。人間は怖いぞ！　今日は半日で帰っていい。この手口は悪辣すぎる、おばちゃんたちと、話し合いをするからな。君には追って連絡する」
マネージャーは立ち上がると、もういいと、手まねでいった。
どんな人間にも、それぞれに自尊心があって、無視されるのが、負けるのが嫌で、それを護るためには何だってやるのだ。村田に認められたいと渇望していた、何人かの顔が思い出された。その村田も又、最も卑劣な方法で反撃に出たのだ。そのことが哀しかった。七重は作業には戻らず、そのまま職場を後にした。今度こそ、さよならだ。

ゆっくりと深呼吸をすると、庭の芳香が体の隅々まで流れ込んでいく。浄化作用のようにも、麻薬に犯されていくようにも思われて眩暈がした。こうしてはいられないのに……。

盟と美砂が学校へ行っている間に、どうしても土蔵の中を確めてみたかったのだ。ガラスの飛んで来た角度からすれば、二つ並んでいる奥の方の土蔵である可能性が高い。七重は土蔵に近づくと、入り口の扉に耳を押し当てた。両開きの扉には閂があって中央に大きな南京錠が下がっていた。

息をひそめると、どこからか、微かな物音がした。石を拾って扉を叩いてみる。僅かな遅れを伴ってリズムを合わせるように、内部からも叩かれていた。やはり誰かいるのだ、助けを求めているのか？

何者かを確めるのだ。七重には、それで起るかもしれない危険までは考えられなかった。

昨日、買い物や献立のメモを入れる連絡箱の中に、土蔵１、土蔵２という木札のついた大きな鍵が入っているのに七重は気ずいていた。家政婦が何か片付ける為に一時的に預かっておいたのだろう。

七重は母屋に戻ると、鍵をしっかりと握り緊めた。

古風な南京錠に鍵を突っ込み閂をはずし、土蔵の重い扉を徐々に開き、中の引き戸の鍵を開けると、午後の陽射しが帯になって内部に差し込んでいった。

中に踏み込むと、七重は目を凝らして闇を見定めようとした。一階にはさまざまな時代ものの箪笥や長持ちが置かれていた、誰もいないようだ。右手に階段があり、七重は二階に登っていった。桐箱や茶箱が棚ごとに整理され、真新しいレッテルが貼られていた。その奥、誰かが後ろ向きになっているのが見える。明り取りの窓がその上にあって、床に赤い絨毯が敷かれている。蔵座敷と言うものなのだろうか。人は影になっていて男か女か判別できない。

「どなたですか？　怪しいものではありません。わたし、今度、工藤さんに間借りをさせて戴きましたの」

七重の声に影が振向いた。白すぎる顔、女だ。

「どうしてこんなところに……？　盟さんや美砂さんのお母さまでいらっしゃるのでしょうか？　おっしゃってください。一昨日わたしに合図なさったのは、何の為ですか？　それに昨晩の夜中……」

女は聞いているのかどうか？　笑い声とも泣き声ともつかない慄音。気でも狂っているのだろうか？

「子供達に、押し込められてしまいましたのよ」

女は言った。声がかすれている。

「どうして？　お母さまは行方不明だと聞きましたけれど……」

「ここにいるのに、なんで行方不明なものですか！　私は、弁護士に勧められて、遺産相続の関係で、

骨董品の一覧を作成していたんです。それを知っていながら、あの子達と来たら、全く、何をするか分らないんだから。お恥ずかしい子供達ですわ。あんな可愛い顔をして、私をここに押し込んで、飢え死にさせる気なんですよ！」

七重は警戒しながら笑いを噛んだ。

「でもおかしいわ、母屋にいらっしゃるのを、わたし、お見かけしたような気が致しますけど？」

「あなた、あの子たちの味方なんですか？」

この時、壁を這っていた七重の手が照明のスイッチを探り当てた。

「何をするの！　消して、お消しなさい！　勝手をすると許さないわ。不法侵入で訴えますよ！」

女は土蔵の中にあっても、命令口調だ。人を人とも思わない傲慢さ、こんな蔵の中でアクセサリーをじゃらじゃら飾り、ロングドレスを身につけていた。飢え死にしそうだなんて……？

「ほら、この死に装束は如何かしら。似合います？　これは鹿鳴館の頃の物です。この家は十二代も続いている名家なんですのよ。しかも、優秀な人材を輩出して来ました。でも、この時代に名家を保っていくのは、容易なことではありません。主人が亡くなったので、相続税で、どれほど持っていかれるか分らないんです。私が、その為に蔵に篭って頑張ってるのに、あの子達は分ろうともしない！あなたが来た為に子供達に鍵をかけられてしまって、退屈紛れに着てみましたのよ。飢え死にに相応

しいとお思いになりませんこと？」
ファッションショーよろしく一回転した女は、初めてその正体を七重に見せていた。長い背骨に持上げられた顔、僅かに段のある鼻、めくれた唇、眉間の黒子、この感じは不快な思い出……。
七重の横隔膜が震えながら上がっていき、肺を圧迫するのか、呼吸が苦しくなった。蕾のような美しさは失われていても、紫色のくまどりがその目の縁を飾っていても、それは紛れもなく朋野佳子。七重が自分の一生を台無しにしてくれたと恨みつづけてきたのは、この女だった。でも、どうして、こんなところで出会うことになるのか？　七重は混乱していた。
「人殺し！」
何故か佳子の方が先に叫んだ。
「人殺し！」
七重も、どさくさに紛れて、それに合せた。相手に合わせることで、漸く言いたいことを言うことが出来ていた。そのことが哀しい。
佳子の顔が大きく崩れ、涙が飛び散る。
「あの子は父親を殺したのよ！　人でなし！　今度は、私を殺そうとしているの。その証拠に、とうとう、外から鍵をかけてしまった。私がミイラになってしまうのを、あの子達は待っているのよ。本

となんです。あなたは子供達のしていることに不審を抱いて、ここにいらしたんでしょう！　あなたは味方ね、私を助けに来てくれたのでしょう！」

佳子の熱い手が七重の手を握り緊めた。

「協力して頂戴！　頼むわ。お礼は幾らでもしますから！　私の洋服と身の回りのものを、旅行鞄に詰め込んで持って来て下さい。それに私の部屋の、鰐皮のハンドバッグの中に、銀行のカードと現金と宝石が入っているわ、靴はミールを二足。わかったわね！」

次の瞬間、七重は身震いして、佳子の手を払い除けていた。

「何をするの？　使用人のくせに、このあばずれ！　ろくでなし！　ハハハ、いい年をして、他人の家に入り込んだ泥棒猫め！」

佳子は言い募る。

「とうとう、本性を現わしたようね！　朋野佳子！」

七重の喉を喜びが、勝鬨をあげて激しく突き上げていた。

「あなたは誰れ？　誰なの？　おっしゃい！　名乗りなさいよ！　何者？」

佳子は気が狂ったように七重の周りを回った。その度に棚にぶつかり桐箱が下に落ちた。この女は香川七重がわからないのだ。それはありふれた過去として、この女の中で地鳴り一つ起こすことはな

かった。そんな馬鹿な！　七重は激しく首を振った。
「人殺し！　人殺し！」
自分の絶叫が耳を突き刺した。七重の喉が引っくり返って血が流れているのがわかった。涙が頬を伝って流れ落ちる。
「何を叫んでるの？　嫌だわ、人殺しは私の子供達のことよ？　この間抜け！」
佳子は興奮のさめた声で言った。
「ふざけないで！　忘れたなんて言わせないわ。二十二年前！」
佳子の手が七重の顎に伸びた。もう一方の手が頭を押えた。照明が七重の顔を明るく見せ、佳子の目が一つ一つ顔の部品を確かめながら、なぞっていく。
「か、が、わ、な、な、え、随分違っているけど、香川七重だわ。そうなのね！」
佳子が手を離したのか、七重の頭が自由になった。
「七重が、泥棒猫みたいに、何故、私の家にいるのよ？　何で、人の家の蔵の中まで踏み込んでくるの？」
佳子が茫然としていた。
「思い出せないなら、教えてやるわ！　あなたは、わたしの弁当に青酸ソーダーを振り掛けるという

手口で、わたしを殺した。私は十七歳、あなたが殺したのよ！　わたしは幽霊！」
「そんなこと言って！　あなた、お弁当食べなかったじゃない！」
佳子が揶揄するように言った。
「そうよ、殺せば自分が一番になれると思うような、単細胞の策略に、わたしは、まんまと引っ掛かったりはしない。わたしが、咄嗟に水槽に御飯を落すと、熱帯魚が次々白い腹を見せて浮き上がった。ものの一秒と懸らなかったわ。あの恐ろしかったことといったら……」
七重の心臓がリズムを狂わせる。
「何を、惚けたことをいってるの。一番は、何時だって、わたしだったじゃない。それを食べもしないで騒ぎ立てて、わたしがどんなに迷惑したか、分ってるの？　二十年も三十年もたって、まだ、人殺しだなどと、人聞きの悪い！　あなたが吹聴していたのね。わざわざ子供達の耳にまで入れて……。私と子供の間が、何もかも上手くいかなくなったのは、あなたのせいよ。あなたこそ人殺しじゃない！」
「違う、あなたはあの時、本当にわたしを殺してしまったのよ！」
七重の頬を涙が次々流れ落ちた。
「勝手な理屈をつけないで、さあ、どいて！　わたしが、こんな処に押し込められて、飢え死にさせられようとしている時に、どうして、そんな昔の些細な出来事を持ち出して喚きたてるの？　さあ、

邪魔をしないで、退きなさい！」

「些細なことですって！　あなたは本当に殺意を持って、わたしを殺そうとしたのよ。それは、事実よ。あの時わたしが、弁当を食べていたら確実に、わたしは死に、あなたは殺人罪を免れることは無かった筈。それさえ、無かったこととして、葬りさるつもり！　わたしはあの後、食物が取れなくなってしまった。食事の度に、誰かが、わたしを殺そうとしているように思えたの。拒食症で長い間、入院や退院を繰り返したわ。漸く、今、社会の片隅で、何とか生き延びているのよ」

七重は気落ちして言った。

「生き延びてる、それはよかったじゃない。子供達に女中として採用されたんでしょ。おめでとう！　ハハハ、そこまで成り下がって、よくも、まあ、平気でいられるもんね。フフ、そう、そうなんだあ。何だか分って来たような気がする。あなたは、そんな小っぽけな存在に過ぎないのに……。あの頃の私には、私を脅かす唯一の存在に見えたのよ。私だってあの頃、受験地獄の中で、万年二番。どんなに勉強しても駄目だった。それが、どんなに屈辱的なものか、一番のあなたには分らないことだったでしょう！　十七歳の少女が、自分より上にいる者を叩き落としたいと思うのは、自然のことよ。あの頃、私は自分の目線以上にあるものを叩き落としていたの。頭だけではないわ。顔も姿も私より美しい人は我慢ならなかった。私は別にあなたが私より美しいなどと思ったことは、一度だって無かっ

たわ。それどころか、醜いんじゃないかと思っていたの。でも私のボーイフレンドは、あなたを美しい人だと言った。それで殺す理由は充分になった。あなたが、あの後、学校を休んでいたのは知っていたけど、それはあなたの問題でしょう。あなたはお弁当を食べなかったのですもの。私はあなたを殺さなかった。ということは事件など何処にも存在しなかったということよ。学校側もそれでいいと……。怒鳴るのはやめて！　競争社会に生きているのですもの、脱落者が出るのは止むを得ないことだわ。今になってまで、恨んで、私の家族をめちゃめちゃにするなんて酷すぎる！　あなたこそ本当の人殺しじゃないの！」

佳子は少しも変ってはいない。自分を誇示して、嵩をまし、七重こそ殺人者だと攻め立てていた。

「あの後、あなたは何事もなかったように大學に進んだ。でもわたしは高校さえまともに卒業出来なかったわ。あの頃のわたしには、全ての人が毒を盛り、毒ガスを吹きかけ、毒針を突き出しているように見えたものよ。その恐怖を克服するのに十五年かかった。無為に過した若い日に、世の中が、今のように色彩に溢れていたなんて、どうしても信じられない。夢は、わたしのなりそこねたものの幻影で満ちていたわ。それなのに、わたしは高校中退の学歴と、ノイローゼの既往歴を持つほか、何の特技も自慢できるものも持たなかった。その口惜しさが、あなたにわかって？　最も酷かったのは、一人娘に望みをかけていた父母さえ信じられなくなったことよ。わたしは他人だけでなく、父母にさ

え殺されるという妄想に陥ってしまったのだから。二人は、失望し、気落ちして相次いで死んでいったわ。その原因は、事件発生の時点で、あの犯罪が正当に裁かれなかったことにあったと、今では分っているわ」

七重は過去の誤りを今こそ正さなければならなかった。その機会が天から降ってきたのだ。　佳子の表情が歪んでいる。勝気で嫉妬深い少女時代の顔の上に、更に塗り込めた厚化粧と年輪。今まで七重は一度も佳子に復讐しようなどと考えたことはなかった。だが、今は違う。彼女か天恵のように此処にいるのだ。少女の日に抑圧してしまった憎しみを、今こそ投げ返す相手がいる。チャンスなのだ。場所は蔵の中。腰に巻いたスカーフが武器になる。七重の心拍が早くなった。

「もういいわ。私達の親子関係を崩壊させ、夫を殺し、私を此処に押し込めたのは、あなたじゃないの。フフフ、あなたは悪魔よ。ご自分のご両親も、私たち夫婦もあなたが殺した。そして、子供達まで殺人犯に仕立て上げるのね！　なんだ、そうなんだあ！　犯人は、あなただ、ハハハ」

七重は必死で微笑し、スカーフを持つ手を伸ばしていった。

突然、土蔵の階下で足音が乱れた。

10　殺人教えます！

「ママ！　ママ！」盟の声だ。
七重は腕に力を込めた。佳子は助けを求めて言葉にならない悲鳴を上げた。何本もの腕が入り組んでいた。
「ちょっと待って下さい、ママ、まだその女に言って置きたいことがあるんだ！」
盟が叫んだ。
「この方、香川七重さんは、僕等の母親になった。僕等が母親を選んだんだ！」
「馬鹿な……」
佳子が鼻先でせせら笑った。
「おまえは夫や子供を、自分の道具に使った。それはエリート一族というバッジが欲しかったからだ。身勝手に若い時はパパの、その後は僕等の尻を叩き、挙句の果てに、パパを裏切って男を作った」
「そうよ。パパはあなたを愛したことなど、なかったのよ。パパが愛したのは、この人、香川七重さんだったのよ……」

美砂は何を言っているのだろう。母親への嫌がらせに、入り組んだ作戦を考え出したのだろうか。
「パパを自殺に追いやったのはあなたよ。わたし達が怖いなどと言って、こんなところに篭ったりして、人の気を見るのもいい加減にして欲しいわ。この人、一人では死ねない人よ、ママ、凶器ならここにあるわ。この女を殺して下さい！　あなたのみじめな一生を賭けて、血祭りに上げるのよ！」
「美砂！　何てことを言うの。あなた達のママは私よ、私じゃないの。私が生んで、そんなに可愛く、育てて上げたでしょう！」
「産んであげたですって！　勝手に生んでおいて！」
「違います！」
「違うもんか、三人で、心中しようだなんて言って。どうして母親が自分の子供を殺せるんだ！　母親失格だよ。子供に未来がないと思うのは、最大の侮辱じゃないか！　僕等には、生も死も、母親も、僕等で選ぶ権利がある！」
盟もまた、自尊心を護ろうとしていた。
佳子は絶句して、蒼白。七重の腕が軽くなり、見ると、足元にナイフが投げ出されていた。
「ママ！　そう、刺したら上に捻り上げるように、するんだよ。そうしなくちゃ、中々息の根は止められないからね」

兄妹が出て行くと、七重は佳子から目をそらさずに、手すりに手を置き、右手で素早くナイフを拾い上げた。

佳子はあまりのことに、度肝を抜かれたのか、回廊に身を寄せて突っ立っていた。カールした長い髪が柱に巻きついている。七重は佳子に向かってナイフを構えた。

その時、土蔵の扉が、ばたんと音を立てた。続いて鍵を掛ける音。

あっ！　七重は声を呑んだ。閉じ込められたのだ！　階段を転がり落ちて行った。あらん限りの力で扉を叩いた。

「開けて！　開けなさい！　あけるのよ！」

もういくら呼んでも、叩いても、扉は開かなかった。何時の間にか鍵は奪われていた。何と無防備だったことか。喉が涸れ、拳から血が流れた。何もかも策略だったのだ。

七重はのろのろと二階に戻っていった。

佳子は子供達の言葉にショックを受けているのか、七重が慌てている間も、不動のまま、さっきの位置に茫然と立ち尽くしていた。

何故なんだろう。いくら彼女に視線を合せようとしても、佳子は宙に視線をそらせ続け、決して七

重を見ようとしない。
「どうなさったの、佳子さん」
憑き物が落ちたように、すっかり殺意をそがれて、七重が佳子を揺さぶると、体は左右に揺れ、柱に沿って滑り落ちた。
「しっかりして、佳子さん、しっかりするのよ！」
言ってから七重は甲高い叫び声を上げた。手にべっとり血がつき、膝まづいた膝は血溜まりの中にあった。よく見ると佳子の長い髪が柱に巻きついて、倒れないでいたのだ。というより、故意に誰かの手によって柱に結わえつけられていたのではないのか？　七重はその髪をゆっくりと解いていった。髪の一房が血溜まりに落ちた。
佳子はうつ伏している。鮮血は背中の傷から流れ出ているらしい。横顔が見えるが、浮腫んだ瞼を閉じ、頬は噛んで窪んでいた。
何時刺したのか、眼にも止まらぬ早業だった。七重は息を止めた。兄妹は殺人を犯し、丸ごと七重になすり付けようとしているのだ。この時になって漸く難題は解けはじめた。
気を取り直し、そっと佳子の手を取った、いくら取る位置を替えても、脈は何処にあるのか分らなかった。呼吸は？　横顔を覗き込んでみる。髪の毛が微かに動いた。呼吸しているのだ。一筋の髪は

呼気で遠ざかり、吸気で吸い寄せられている。
生きている！　助けさえすれば、殺人犯にされる危機を乗り切ることが出来るのだ。子供達は扉を閉じたものの、外で、中からの反応を待っているに違いない。早く、生きていることを知らせなければ……。生きているとなれば放って置くわけにはいかない筈だ。
七重は階段を慌てて降りた。あらん限りの力で扉を叩いた。
「開けて！　開けなさい！　お母さまは、生きていらっしゃる。あなた方は殺人犯にはならないわ。早くお医者さんを呼んでいらっしゃい！　早くしないと死んでしまう！　いまなら大丈夫、悪いようにはしないから……」
最早、誰もいないのか？　聞こえないのか？　殺意のせいか？　やはり頑として扉は閉じたままだ。
七重は上に上がって、そっと髪の毛一本の動きを確めては階段を降り、扉を叩いた。何回繰り返したことだろう。もう喉は涸れ果て手は腫れ上がった、これほどの重傷者を七重一人の力で助けられる筈もない。水！　しかしそれもなかった。
佳子はここに篭ったくらいだから、食糧や飲み物位はありそうなものだ。携帯電話はどこに？　七重は必死で探し回わる。ポットはあったが、押してみるとスカスカと空しい音がした。
部屋の隅に外国製らしい応接セットがあって、その上にバッグや帳簿が広げられ、ノートパソコン

には、骨董の一覧が表示されたままだ。目を叛けると、テーブルの下、下着が籠からはみ出して盛り上がっているのが見えた。七重は、とても触る気にはなれなかった。

「殺したのは、この女です！」

美砂の声が聞こえてくるような気がした。警察に通報した頃かもしれない。放り出してあったナイフをもう一度手に取った。これは美砂が投げてよこしたものだ。暗がりに落ちたので知らずにいたが、手に血がついていたのはこれを持ったせいだ。

あのとき美砂は、佳子の背後に立ち、腕を曲げて顔を隠していた。では美砂が犯人だろうか。しかしあの可憐な十三歳の少女に殺人など出来る筈もない。では盟だったのか。盟は母親の側から、すぐ七重のそばに位置を替えた、母親から七重を庇うように。犯人は一人しかいない、どさくさに紛れて刺したのはおまえだ！　犯人は香川七重。

誰もそう信じる。いや、無意識の瞬間ということもある。現に、さっきは盟と美砂の目の前で、七重はあの女を殺そうとしたではないのか？　これが兄妹の周到な犯罪なら完璧なものだ。

香川七重には工藤佳子を殺す動機があり、現場での犯行を目撃した者が二人もいて、おまけに凶器には七重の指紋、その着衣に佳子の血痕。いくら否定しても、どうにもならないのだ。

今にして思えば、出会いも、何もかも、不自然すぎた。あの気違いバス、強引な引越し、母親

を選んだなどと……。それにしても、盟の父親殺しの告白は何だったのだろう。七重の心理状態や運命を見通して、安心して告白したのではなかったか？　相手が子供と思って油断した、あるいは年甲斐もなく盟に恋愛感情を持ってしまったのか？

七重は怒りで体中が震え出し、頭も思うように働いてはくれない。漸く辿り着いた結論は、いずれ彼等は七重を母親殺しの罪で警察に突き出すために、もう一度土蔵の扉を開けなければならないと言うこと。七重が餓死したのでは　不自然ということだった。

希望はまだある。七重は、明り取りの窓一つで希望に触れているような気がした。佳子が微かに動いた。手を宙に上げ、揺ら揺らさせる、まだ意識があるのだ。水を要求しているのか？その方向を探し、箱の中からワインとグラスとジュースの空き缶を取り出した。収穫は１５０ＣＣ程の飲み残しのワイン、これだけが命綱か？

佳子がうつ伏せのまま、こぼしながらもグラスに注いだワインを貪るように呑み干した。ほっとするのも束の間、傷が痛むのか呻き声を上げ始める。

傷口から雑菌が入って化膿したらいけない。勿体無いが、傷口にワインを注ぎ、七重自身も残りを口に含んだ。生き返ったように意識がはっきりした。

佳子と一緒にいることに、いたたまれなくなって、階段の上がり口に腰を掛け、外からの響きに耳

を澄ました。朝になれば盟も美砂も考え直すかもしれない。ワインを口にしたためか、前にも増して喉が乾いてきた。

みすみすここで死ぬことはない、なにか方法はないのか？　孤島の一軒家ではないのだ、都市の大通りに面した町屋の中、生き残る道は残されているに違いない。

心を落着け、辺りを見回した、入り口に片寄せられている冷蔵庫が目に入った。影になっていたコンセントを探し出し、冷蔵庫に繋いでみた。

ブーンという音が、土蔵の中に命の始まりのように響き、死を打ち砕いた。冷却したものは結露する。水が出来ない筈がない、命がこれで繋げるのだ。

七重は身体の消耗を防ぎながら、じっと待った。水さえ確保出来れば生き延びられる。眼を閉じると、希望が赤い風船みたいに、陽気に膨らんでいった。

急に冷蔵庫の音が途切れた。冷えたのだ！　七重が閉じていた目を開けると、真っ暗。電源のヒューズが飛んだのか、誰かの手で電源が切られたのだ。七重は冷蔵庫を叩いたり、蹴ったりした。もはや、どんな反応も戻ってこない。それでも、冷凍庫を開け指を這わせていく。指に水滴がついてくる。夢中でしゃぶった。あるのは暗闇と、佳子の呻き声だけになった。

絶望はとらない。頭を働かせるのだ、突破口はある筈、そうだ、ＳＯＳを！

煙や炎が見えたら、火事と判断して消防が飛んでくるかもしれない。七重は佳子のバッグからライターを探し出し、茶箱の中で衣類に火をつけた。衣類は燃え上がったが、窓から煙は出て行かず、みるみる蔵の中に煙が満ちて、呼吸が苦しくなった。佳子が咳き込んでいる。失敗！　これでは窒息死だ。窓から火のついたものを突き出したら？　佳子のハンカチを掃除機の管の先に結び付けて火を点けた。炎は窓格子をくぐる瞬間消え、ハンカチは萎えた白旗。この孤島のような立地条件では、兄妹が見つけて笑い転げるのが落ちかもしれない。土堤の上から、見つけてくれる手だてはないか？　煙くらい上がっても、落ち葉を焼いている位にしか、認識しないのかもしれない。

この家の、知人、縁故者は現われないのか？　養子をとることで漸く保たれた家系に、近親者の助っ人は現われそうも無かった。

携帯電話も、七重の持って入った土蔵の鍵も、既に彼等の手で、巧妙に持ち去られたのだ。失望すると、ガラス瓶のかけらが、窓の下に転がっていた。佳子はあの時、ここから七重を狙ったのだ。

もう、横たわっているしか術はない。すべての希望を摘み取られて、七重は茫然として佳子の傍に坐っていた。佳子の呻き声が七重自身に代って呻いてくれているようにも思われてくる。

三日目の朝、佳子のうつ伏していた顔が何時の間にか上を向いていた。まだ寝返る力があったのだ。思ったよりも傷は浅かったのだろうか、窓からの光で、その鼻が激しく動いているのが見えた。

失敗でますます飢餓感がひどくなっていた七重は、興奮した。鼻は漂ってくる匂いに震えながら動き出し、口はそれを追越し、ごくりと生唾を飲んだ。下でギーと扉の閉じる音がした。

誰かが食事を置いて行ったのだ。臭いで分る。コーヒーを口にしようとして、はっとした。弁当に毒薬を振り掛けられた時のことを思い出したのだ。彼等は佳子の子供、バスの中でジュースを飲んだ時、泊り込まなければならない程、眠くなったのは、少量ではあっても、睡眠薬が入っていたとしか思えなかった。今度は多分、毒入りの食事で自殺させる作戦ではないのか？　佳子殺しの真犯人として自殺死体で発見させる。

七重はかなり長い時間、コーヒーの香りを嗅ぎ、オートミールを見つめていた。本能は、はあはあ息せき切って、いまにも飲み込もうとしたが、意地悪い理性が、コーヒーもオートミールも下にぶちまけていた。濡れたコンクリートを腹ばいになりながら、ひりひり痛む喉を鳴らし、七重の唇が、床を這いずり回っていた。

鉄格子の明り取りの窓、小さな窓から悪夢のような青空を見ている。こんな日には太陽の光が、木々からしだれるように降っているに違いない。その下で笑っているのは誰。

七重はまだ生きているのだ。あれから何日たったのだろう。口が乾燥し，胃が圧迫され、身体が浮腫んで来たような気がする。耳鳴りがしていた。

蔵の中にある唐櫃から出した。客用の布団の上で、二人の女が死につつある。

「亡霊になっても、出口がないのでは二人分の背骨を数え、輪繋ぎでもして暮らすしかないわね」

「一人、分」

佳子が答えたような気がした。

「そう、ルールをわきまえないあなたとでは、わたしだって嫌」

高校生の頃、近くの大学に通う七重の初恋の青年がいた。彼は毎日駅で七重を待ち伏せしており、手紙を何通か手渡された。一度だけ七重も返事を出した。それが何時の間にか佳子が彼と一緒に歩いているようになった。七重は悲しくて、彼らの前を必死で駆け抜け、大通りから路地へ走りながら泣いた。

今になって　佳子の言葉から、やっとわかったのだ。彼が恋していたのはやはり七重だったのだと、佳子が一方的に纏わり付いていたのだ。

あれから色々あったのに、今、死の床で始めての恋人が戻ってきた。彼は七重の思い出の中で成長することを拒んでいる。盟はわたしに理想の母親を見ようとしたのに、わたしは彼の中に恋人を見よ

うとしていたのだ。不純なわたしはそれによって罰せられたのだと思う。あの学生の名前は三上栄介、栄介？　視界が曇ってきた。最期のワインを啜った。間もなく最期になる。

意識が遠くなった。

七重はびくっとした。随分長い間意識を失っていたのかもしれない。大腿部に痛みが走った。ひらりと、ひとひらの肉が七重から掬いとられ、離れて行ったような気がした。目を開けようとしても、目を開けようとしても目が開かない。手を動かそうとするが、手がない。

今度は左の大腿部がさっと冷たくなった。死が近くなると、こんな形で部分的に死に、こんなふうに昇天して行くものなのだろうか？　餓死するまえの幻覚や妄想が現われ始めたのかもしれない。飢餓感はもうない。七重は努力の末、瞼を僅かに開け、やぶにらみになった。そこには近すぎるためによく見えない何かがある。覆いかぶさるように何かが動いた。動いているのは唇ではないか！　白い歯が赤いものを引っ張っていく。喉を鳴らして、七重の上で、誰かが貪り食っているのだ。血がしたたり落ちる。

佳子だ！　何かがきらりと光った。わたしは死にかかっているのに、どうして彼女は食糧を得たのだろう。体力を回復しているのか、佳子が満足そうに口を拭った。強烈なショックがまだ眠っている七重の脳髄に伝達される。

「餌はわたしだ！」
佳子は食べ足りたのか、いざりながら遠ざかって行った。最期の食糧に注いだ血走った佳子の眼。
「わたしを餌に生き延びたのだ！」
またも彼女にしてやられているのか？　何故、わたしはそのことに思い至らなかったのだろう？　どうして、佳子を食糧と考えなかったのか？　すでに、ナイフの切り目が入っていたのは彼女の方だったのに……。口惜しかった、それは、救いようのない性格の欠陥のように思われる。七重は痺れた手を拾うように体の下から出して、自分の表面に触れてみた。これが人間だろうか？　七重には、もはや、人間らしい形はなくなっていた。削ぎとられた幾つかの面が、乾いて萎縮し、新しい傷から血を流していた。
殺したいほど憎みながら、何故佳子を殺してしまわなかったのか？　何故、彼女の傷の消毒までしたのだ。無造作なやり方であったにしても。その為に最期の命綱を失ってしまっていた。壜を傾け唇をつけ、最期の一滴迄すいあげる。七重の瞼からなけなしの水分である涙が、頬の窪みを伝って耳に流れ落ちた。手で涙を掬おうとすると、手はそばに落ちていたナイフを握っていた。
七重には自分の体が、最後の餌を狙って動くのがわかった。屈辱と怒りに燃えて、目の焦点を合せようとすると、佳子の横顔がひしゃげて見えた。

11　兄妹

玉木警部補は部屋の中を歩き廻った。どうして、そうなるんだ！

「誰が言ったのでもない。工藤教授、本人が自殺しそこなったと、第一発見者のガードマンに、最期の力を振り絞って言ったんだよ。他にも、これから自殺するという電話を大阪の友人が受け取っている。これをどうして他殺の疑いがあるなどと……。解剖所見では、傷は二度刺されてはいるが、自殺によくあることだ。既に、二ヵ月前に結論は出ているのに、何故、今頃になって、蒸し返そうとするんだ？」

「ですが、X大の桝山助教授は、こう言ってるんです。教授には自殺するような気配は皆無だった、と。まして、これから自殺するなどと予告するような、芝居がかった人物ではないとも。手がけている新思想辞典も七分通り完成段階にあり、順調に何もかもいっていたそうです。こんな状態で、研究者が自殺する筈がないと訴えているんです。これで、もう八回も足を運んできています。大学関係者

なのか、外来者なのか、真実を知りたいと！」
名寄刑事が困惑していた。
「きみから報告は受けた。しかし、どんなに出来た人間でも、発狂することはある。発狂する場合、行動を選んではいられないんだ！」
「工藤教授は狂ったと思わせたかった、のではないかと、桝山助教授は言っています！」
「参考人から事情聴取はやった。教授が自殺と言ったのは、自殺として葬られることを希望していたことになる。腸を幾重にも首に巻きつけていた賑々しさは、発狂していなかったとしても、そう見られたいと欲していたんだ。それを今更……」
玉木警部補は逡巡していた。何もかも追及するだけが、自分達の使命とも限らないのでは……。玉木警部補はわざと気のなさそうな顔つきで、窓の外に目を移した。
警部補は知りながら見逃そうとしていた疑いがある。名寄刑事は苦々しげに額を指で弾いた。長い沈黙の後、玉木警部補は言った。
「この件は、きみの内偵にまかそう。だが深追いするな！　追い詰めるな！　いいか、それを忘れるな！　」
玉木警部補は名寄刑事の手を握った。手を放すと、名寄刑事の手の中に小さな紙が残っていた。　振

り返る度に、後ろから来る靴音が雑音に消えてしまう。町並みに入って工藤盟は足を止めた。黒いものが路地に素早く消えた。

つけているのは刑事か？　それとも母と浮気していた家庭教師か？　とにかく、誰かが盟に疑いを持って、つけて来るのだ。漸く定期試験がうまくいって、最高の気分でいたのに……。今回のテストは幸運としか言いようがない。これも最期の打ち上げ花火だ。

何故か、父を殺したのが、他の誰でもなく、自分であることで許せる気がしていた。でも、それを外部から裁かれ罰せられるとなると、恐怖は巨大な化け物になる。

鋼鉄の手が、肩に置かれていた。若い男がポケットから警察手帳を覗かせ、微笑している。

「工藤盟君だね、これに見覚えは無いかな？」

刑事は分厚い掌の上から小さな紙切れを摘み上げた。茶色に薄汚れた、デパートのレシート？

「これを買った日、きみは学校を休んだ。休みながらデパートをぶらぶらしているのを、見掛けた人がいるんだよ。二千五百円、きみが受け取ったレシートじゃないかと思ってね」

盟の息が停止した後、ゴウっと音を立てて出て行った。来るものが来たのだ。もう少し遅くれて来て呉れたっていいのに……。人生は甘やかしてはくれない。

「これは、工藤教授の研究室に落ちていたものだが、血で汚れていた！」

刑事は血で汚れた手を開いて、肩をすくめ、驚きの表情を表現して見せた。そんな下手なゼスチャーに引っ掛るか……。

「秘書が落したんじゃないんですか？」

盟はそっぽを向いて、目を閉じた。目の中が血の赤で泡だってくる。これでパパは、息子に殺された不名誉を隠し覆うせることは出来なくなる。

「そうかな？」

刑事は目の高さまでレシートを翳してから、大切そうにポケットの中にしまい込んだ。あの日ナイフをポケットから取り出した時、一緒にレシートを引きずり出してしまったらしい。

「じゃあ！　僕知りませんから！　」

盟は、右手を挙げると、脱兎のように走り出していた。決して振り向かない。工藤家の前まで来ると、脇の下に挟んでいた上着を、逆手で放り上げた。

「畜生！　みんな、くたばってしまえ！　」

美砂は玄関の格子戸を開け、盟を引っ張り込むと慌てて鍵を掛けた。

「何かあったの？　ないならいいんだけど？　さっき、村越運転手が来たよ。あの女を如何したって、しつっこく聞いたから。知らないって、言っといた」

「それだけで、帰ったのか？」
盟は心配そうに、美砂の全身を点検でもするように見回した。安堵すると目を瞬いた。美砂は急に大人びたみたいだ。
「骨董品を下さい、でないと、ひどいぞーって、凄んで見せた。それからあ、非番の日に又来るからあ、土蔵に案内しろって言った。どうする？　こてんぱーに、捻っちゃおうか！」
美砂が気丈に、おどけた表情をしてみせる。ナイフのレシートと、村越運転手、それに父の傷口に当てたワイシャツ……。盟のこめかみで非常ベルが鳴り響いた。村越の他にも母と七重の行方不明に気付いている者がいて、警察に密告し、父の自殺まで疑って、外堀からじわじわと……。
盟はリビングのカーテンを細めに開けて、抜け目なく外を窺った。見える範囲には人影はないが、樹の影、庭石の向こうに隠れて監視していそうな気がする。盜聴器がないか？　盟は腹の底から突き上げてくる叫びを押さえ込んで、必死で机の下、ピアノの裏まで探し回った。
「僕はさあ、自分や周囲をごまかし続けなければならなかったんだ。だってえ、僕は、自分の力がさあ、まるっきし、わからないんだから！」
美砂がものを透かしてみるような、おかしな目付きになった。
「もしかして、お兄さん、香川さんを本とに好きだったんじゃないの？　なんだかそんな気がして来

たあ。パパが昔、結婚したいと探し回っている頃、香川さんは精神病院の中だったわけでしょう。そして、その息子がまた……」

美砂が身をすくめて、足を踏み鳴らした。

「馬鹿だなあ、あの時は僕がものぐさになってさ、手を引っ張って、起して貰おうとしたら、倒れ込んでしまったんだよ。言っておくけどね、僕が一番大切に思っているのは、美砂だよ！　ほんとの、本とだ！　覚えていて欲しい、どんなことがあっても！」

美砂の口元に微笑が戻った。少女らしい潔癖さで、ああいうことに耐えられなかったのか。佳子が家庭教師と抱擁している現場を目撃してから、美砂は佳子を決して許さなかった。

「お袋は、僕そのものなんだ！　どんなに、もがいても、僕はそこから出られない！　これは、変りようもない現実だから。僕の成績はこれからどんどん落ちて、一人どころか、何人殺しても殺しきれなくなって、のたうち回ることになるような気がする。美砂は知ってるかな？　お袋の実家、朋野家はな、一代で財をなした成金だ。祖父さんは自分の家にないものを金で買った。それが、工藤家の家系だ。工藤の血縁にあるパパと、自分の娘を両養子にして結婚させた。由緒正しい家系の、頭のいい優秀な子孫を熱望したんだ。でもさ、確率からみたって、半分は、朋野の馬鹿を引き継ぐんだよ。それが、僕！　美砂は、工藤家の知能を引き継いだ。ただ、馬鹿でも、朋野家の人間は、努力家で、上

昇意欲に満ち満ちていた。だから、ある程度まではいける。ママも、僕もそうだった。だから限界が見えてくると、嫉妬心から殺人だってやりかねない。こんなこと、美砂には分らないかも？　僕はお袋のせいで、自分や妹まで侮辱されるのでは、かなわないと、パパに言ってやったんだ。パパは、それを取り上げもしないで、良い機会だからなんていって、僕に有名校受験をやめて、普通高校に行き、自分の好きな事を探すようにと言ったんだよ。一貫校に、途中から入って苦労することはないよと。それを聞いた途端、僕は辱めを受けたと思った。だって、パパはそこを出ているんじゃないか！　気がついたら殺ってしまっていた。……だのに、パパは、僕に血のついてるシャツを脱げの、早く逃げろのと、ちょっかいばかり出していた。僕は美砂のパパを殺したんだよ！　理由はパパが本とのことを言ったからだ！」

盟は、大人になったような気がした。これが。遺言になるかもしれないのだ。宿題を終えたように、体がくにゃくにゃになった。

美砂の睫毛の下で膨れ上がり、変形した水滴がぱらぱらと、音をたてて、こぼれ落ちた。

「本とのことって、本当のこと？　現実が嫌なら生きていけないじゃない？」

美砂の言葉がグサーっと来た。全く、これだから、子供は怖いんだ。

「そうさ、パパを殺しても、現実は容赦しない。全世界の人間を殺せなかったら、僕死ぬしかないな！」

「あんな素敵なパパなのに、どうして救急車を呼ばなかったの？　それではママの言っていたことが、正しかったんじゃない！　だから、心中しようって、ママは言った。そうだと分っていれば……」

美砂が始めて盟を非難し、悔悟の言葉を口にしようとしていた。ママの見直しが始まるのだ。

「パパは、何故、救急車を呼ばなかったんだろう？　呼んだとしても、生きることが不可能な傷だったけど。パパは気力であれだけの時間、意識と命を保っていたんだ。パパの力を持ってしても、息子に殺される恥を、帳げしには出来なかった。今日、刑事が来たよ。僕が勝ったんだ。あの女の血が勝ったのさ！　これで、パパのいい格好しいは、お終いだ！」

美砂の頬骨の辺り、日焼けした小麦色が縞模様に変わっていく。美砂を苦しめているのだ。

盟がどんなに歯を喰い縛っても、腹に力を入れても、震えは生き物のように跳び回った。盟は部屋から出て行こうとする美砂を呼び止めようとしてやめた。

美砂の素直な長い髪が、震えながら肩で大きく波打っていたから……。

12　遺　書

香川　七重様

僕は今、一人ぼっちで、死と向かい合っています。あと残り少なくなった時間の大部分を使って、あなたが生還する日のために、遺書を残すことにしました。

あの土蔵の二階には二十畳ほどの蔵座敷があって、昔、この家の祖先が隔離されていたことがあるのだと父方の祖母から聞いたことがあります。そこには災害用の食糧が保存されていたとも、組み石をはずすと湧き水が出るようになっているとも、話してくれたものです。万一幽閉されたとしても、生きる力を持ち、必死で探したら、少なくとも二週間や、三週間は生き延びられるのだそうです。僕は此処まで来ても、生死は一続きだと思えてなりません。これからの日々を妹と僕と、貴女とで仲良く暮らして行けるような錯覚に陥ってしまいます。

ここで、貴女に対する数々の非礼を、お許し戴きたいと思います。すみませんでした。

すべては二十二年前の、母の殺人未遂事件を知った日から始まりました。あの日僕は、母のことで級友から侮辱を受け、生れて始めて暴力を奮いました。母を問い詰め、母を捨てました。そのことを父と話し合うつもりが、こともあろうに、父を殺す結果になったのです。

貴女を知ったのは、父が最期に逃げろと言った時、机の上にあった封書を僕に押しつけたからです。不登校について、僕の担任の教師から連絡を受けた父は、探偵に母の事件と、貴女についての調査を依頼しました。調査書を見て、僕と妹は貴女が可哀想でなりませんでした。母は何ひとつ罰を受けなかったのに、貴女だけが、母の虚栄心や嫉妬心の犠牲になった。貴女は拒食症と対人恐怖症で何回も入退院を、繰り返していました。お母さまが過労から肺炎で亡くなり、お父さまがそれを追って自殺されたことも、家屋敷が人手に渡り、無一文で投げ出されたことも知りました。孤独になった貴女は古びたアパートに住み、ホテルのメイドとして肉体労働をしていました。今考えると僕が研究室に行った時、父はその調査書を読んでいたのです。

父の死後、僕は家庭教師にやめて貰いました。母は絶望しました。母を不倫に走らせたのには、今では、父にも責任があったのだと思っています。母は、僕が父を殺したと確信を持っていました。そして自分の身の危険を察知して、僕から身を守るために土蔵に移ったのです。勿論、蔵の鍵は母が持っていましたし、食事は外食したり、夜、母屋でしたりしていました。

僕は貴女を、わが家に引き入れるための作戦を立てました。バスの運転手は、以前、祖父の運転手だった男で、盗癖があるのです。僕は彼の前科を種に脅し、協力させました。貴女の帰宅時間を調べ、ちょうど、配車の具合がうまくいき、彼が駅前で人を降ろすと、僕等は乗ったまま、貴女の前でバス

を止めてもらいました。乗車した人達の扱いに苦労しましたが、何とか計画通り、妹を病気にして貴女を引き止めることに成功しました。バスにしたのは用心深い貴女は乗用車には乗ってくれる筈がないからです。貴女をわが家に引きつけること、それが計画の第一段階でした。

美砂の熱源は使い捨てカイロ、アパートの管理人に怪情報を流したのも、貴女の不在の時を狙って、荷物を運び出す強引なやり口も、すべて僕の作戦だったのです。貴女は僕達が子供だから油断しました。もしかしたら今までの反動のように冒険をしたい気分になっていたのですか？

用心深い貴女が、僕の言いなりになって行くのが不思議でした。

仮りであっても、貴女が母親という立場になかったら、僕は完全に貴女の虜になっていたと思います。貴女といるのが楽しかった。貴女は常識に囚われず、聞き上手で寛容で、何処までも節度を保っていました。僕達は束の間の安らぎを覚えたのです。

貴女が母の存在に気付き、土蔵に関心を持ち始めるようになって、僕は母のいる土蔵に鍵を掛け、美砂が母の食事を運びました。

そこで計画を一歩前進させることにしました。同情からもっと積極的な意味で、貴女に対する態度の見直しを行うものです。

そんな長い落ち込みの半生を送ることになる位なら、貴女は母に薬を盛られた時、母を殺すべきだ

った。でなければその弁当を食べるべきだった。母の子供である僕達はそう思いました。弁当を食べなかった貴女は、自滅する何の理由もなかったと思えてならないのです。それは、貴女のようにすべてに無力で、無抵抗である罪です。勿論、母に正当な罪を与えず生徒に厳重な口止めをし、事件をうやむやにしてしまった学校側、更にそのような働きかけをしたであろう母方の祖父母にも責任があったとは思いますが……。あなたは生きながら死んでいたとおっしゃいました。

そのような気分で生きることに、僕は批判的です。あなたは結局、僕達のいいなりになりましたが、それは、あなたのおっしゃるように、本当の意味で生きていないからです。

これからあなたが、本当に生きる為には、貴女の死んだ日に遡って、僕等の母を殺すべきです。

殺せ！

殺したら、貴女は生き返るのだと、僕は思いました。貴女が一人で母を殺せないなら、手伝ってあげてもいい、だが、とどめを刺すのは貴女だと……。

僕は長い思案の末、貴女に父を殺したことを告白しました。その為にどんなに気が休まったことでしょう。これを聞いてくれる、母を求めていたのでした。と同時に殺人者である僕の心と貴女の心が同調し、殺人を忌避しない精神構造になって欲しいと思ったのです。

あの前日、僕は土蔵の鍵をわざと連絡箱に入れて、貴女の様子を窺っていました。翌日は学校が休

みで都合よく、家政婦には休んでもらいました。貴女を母のいる土蔵に導くこと、これが計画の第二段階です。鍵を見つけた貴女は僕の思惑通り土蔵に入って行き、恨みを母にぶっつけ、母の肩のあたりでスカーフをひらひらさせていました。僕の目にはとても母に対抗出来ないように見えました。

僕達は自分達の手で新しい母を選んだことを宣言し、溜飲を下げました。これは同時に貴女への応援歌でした。その後で僕は母を後ろから刺しました、驚いた妹がナイフを引き抜いて貴女の前に投げ出したのです。後は貴女がとどめを刺すのです。それで貴女の復讐は終り、僕の計画は完成します。

母を殺しましたか？

妹が食事を運んでいった時、貴女は母を介抱していたということです。

気に入りません、僕達がここまでしてあげているのも、貴女は母を殺せないのではないかと思い始めたからです。それでは、貴女はやはり死んでいるのだ。本当に生きているのなら、貴女は土蔵の中で闘うだろうと妹は言います。僕もそう思う。

しかし貴女の勝利を確めることが、僕には不可能になりました。刑事が触手を伸ばし、あの運転手の脅迫が始まりました。僕はあらん限りの力で、プライドを呼び越こし、自分の名誉の為に死にます。誇りを持てるうちに早く死ぬしか、僕にはどんな方法も見つからないのです。いまなら、かろうじて

エリート予備軍として死ねる。言ってみれば、僕にも美砂にも母の血が流れているのです。強者の論理に従うしかその方法をしらないのです。

貴女の心がわかる振りをして、結局わかっていないことが、死を前にして、僕にも分ってきました。視点を変えれば、貴女はあくまでも、貴女らしく立派に生きたのかもしれません。

最後に何よりも、僕達を興奮させ、甘い気分にさせたのは、貴女が父の初恋の人であり、父がなお貴女を忘れかねていたという事実でした。父は、僕が友人に暴力をふるわれる発端となった事件を聞いて、被害者は貴女だと直感したのだと思います。父はあなたの高校生の時の写真をみせて。興信所に調査を依頼したのです。美砂は父が貴女の写真を肌身はなさず持ち歩いていたに違いないと言います。

今、僕に見えるのは、不思議に貴女だけです。この部屋のどの位置にも貴女が見えます。父の愛した人を母親に選んだせつなさを胸に、一足早く父のそばに参ります。父は何と言って迎えてくれるでしょうか。

ＰＳ　まだお気づきになっていないようですが、蔵に鍵がかけてあったのは、始めの二日間だけでした。

○○○○年　○月　○日

工藤　盟

海鳴寺への道は樹々もまばらで、思ったより明るく、頭上に広がる青空に向かって石段が窄まっていく。その上と下では天国と地獄、勾配はとても急で、一段の高さは、二十五糎位はあるだろうか？

盟は一段一段を、踏みしめながら登っていった。すぐ降りてしまうのに、それでも息を切らして登っていく几帳面さが、自分でもおかしかった。

最上段に立つと五重の塔が目に入った。かって、父と二人で来たことがある。その左手にある鐘撞き堂に上がった。下は切り立った幾つもの岩が崖を作って海に落ち込んでいる。

もう、迷わない、何も考えない。

盟は最期の空気を胸一杯に吸いこんだ。あとは、ほんの少し、足下を狂わせるだけでいい。これが立派な家系に生れ、良い素質を受け継いだ者に相応しい死だ！

始めふわっと、やがて加速度を増して、盟は落ちていった。何がおかしいのか笑いが止まらない。衝撃が大きくなっていくのに、頭や背に加わる痛みは遠くなっていった。

13　復讐終りましたか？

封がしてなかったので、美砂は七重宛の遺書を読んだ。盟は遺書の中で、美砂の罪まで引き受けていた。美砂はあくまでも自分の意志で母を刺したのだ。佳子は盟に夢中だったから、美砂は小さい頃から栄介に懐いてきた。現在自分の能力が信じられるのは、勉強の面白さや、考え方の基礎を幼時に栄介から教え込まれたことと、佳子に獲りつかれなかったせいだと分っていた。

父の栄介が大好きだったから、佳子の不倫行為が許せなかったのだ。思い出しただけで、鳥肌になった。しかし佳子も可哀想に栄介に愛されてはいなかったのだ。そのことが哀しかった。今になって思えば、美砂にも、盟にも、我慢ならないことが多過ぎた気がする。

まだ、盟の死の知らせはない。土蔵は静まり返っている。庭に出ると暫く見ないうちに、緑が驚くほど濃くなっていた。二人を押し込んで、蔵の扉を閉じてから、二週間はたっていた。七重は生きているかもしれない。いや、今、気がついたのだが、毒に敏感だった七重が、閉じ込められた蔵の中で、あの食餌を口に入れた可能性は、少ないのでは……。毒など入れていないわ！

人間、生きる気になれば、どんな工夫だって出来る筈だ。今は二十一世紀、二人で力を合せて蔵から脱出しているのかもしれない。そんな夢が見たい。蔵の中で生きているなら、助け出さなければならない。二人が死んでいたとしても、最悪の場合、盟の遺書が美砂を救ってくれる。盟は、美砂を計画、実行の責任から意識して外し亡霊に遺書を残したのだ。最期の二行が、美砂を殺人罪から回避させてくれる。といっても、まだ十三歳だけど……。十四歳未満は刑法上、責任能力を問われないなんて、今時の中学生なら誰だって知っている。

盟の愛したのは美砂だけだった。その証拠に、七重は生きていても、死んでいても、佳子殺しの罪になるのだ。

音を立てないように扉を開けた。昼の光が暗い蔵の内部に入り込んでいき、埃がきらきらとダイヤモンドダストみたいに舞い上がった。入り口に美砂の差し入れたコーヒーとオートミールが飲まずに投げ出されたのか、床に染み込んで不気味なアメーバー模様を描いていた。異臭が鼻を突く。美砂は自分が二人をどんな目に合せたのか、今になってわかった気がした。階段を手すりに沿って、手を滑らせながら上っていった。

父を殺した盟は自殺しなければならない。みんなの死に方がどんなに強烈でも、賢ければ、それによって自分まで命を落すことはない。「あなたは頭がいいんだもの、怖いものなんかない筈よ」美砂は

しっかりと鼻をつまんだ。
重心を移動させ、左足をそっと出した。とたん、ぼろきれのようなものが、足に触った。怖くて一瞬目をつむった。つむった目を開けたとき、それはもう、肉片のこびりついた骨、人間らしきもの。信じられない思いで、尚確めようとすると、髪のへばりついた人間の頭がぐらりと足元に崩れた。
息苦しい、呼吸を忘れていた肺がくしゃくしゃになって、必死で腐臭を呼吸した。ママなのだ！こんな姿は刺した美砂に対する恨み。
ふと、何かが動いたような気がした、誰かが動いている。七重が生きていたのだ。
美砂は動けない。突然、笑い声が土蔵中に響きわたった。それは野生の獣の叫び声に似ていた。
「ご、ごめんなさい！　香川さん、私達、あなたに、復讐をさせてあげたかっただけなの。その証拠に、こうしてお迎えに来たでしょう！　お兄さんは自殺したわ、美砂は一人ぼっちになってしまったの」
美砂は人影に向かって言った。人影は光を背に粘つく足音を立てて、一歩ずつ近付いてくる。影は押し黙ったままだ。衰弱していて、歩くのがやっとらしい。美砂が足元に気を取られていると、影は彼女の脇を素通りし、急に別人のような素早さで階段を降りはじめた。その時になって、あっと思った。美砂は大慌てで、ポケットの上から鍵を探った。

人影が振り返った。いま光がその横顔を浮き上がらせている。髪を振り乱してはいるが、僅か段のある高い鼻から、形の良い顎の線は、少しの衰えも見せていない。

「ママ！」

その顔が勝ち誇って唇を嘗めると、美砂を振り捨てるように肩を振った。

木々の向こうに佳子が無言で消え、土蔵の扉が音を立てて閉じた。美砂は足で扉を押し返し、泣きながら外に転がり出た。

「ママ、何を食べたの！　何を食べていたのよ！」

「美砂ちゃん、どうなさったの？　お兄さまが……、いま、刑事さんが知らせに来て下さって……」

通いの家政婦が動転していた。

「一体何があったんです」

名寄刑事が佳子を見据えた。

「さあ？　私のことならご心配なく。この子、お腹をすかしていますのよ」

佳子は嘲るように言った。美砂はへたへたと坐り込んでしまう。佳子は三週間も閉じ込められていたとは思えない確かな足取りで、母屋に向かって腰を振って行く。

美砂は刑事に囁くように聞いた。

「お兄さん見つかりましたか？」
「後でゆっくり、あちらでお話しましょう」
名寄刑事は汗ばんだ首筋を見せて、佳子の後をつけて行った。
「午前十一時頃、航行中の漁船から海鳴寺の岩場に投身があったとの通報があり、十三時三十分、現地の警察が遺体を収容しました。所持品から工藤盟さんと……、しかし確認してもらわないと……」
破局は思いがけないほど早く来た。村越運転手が窃盗の現行犯でつかまり、盗品のなかに工藤家から持ち出した茶器類があったことから追及され、盟から譲り受けたのだと主張し、その交換条件として、香川七重を工藤家に誘いこむ手伝いをしたと自白したのだ。香川七重の捜索が始まり、捜査令状によって、工藤家の土蔵が開けられた。
名寄刑事と玉木警部補が信じられなというように、頭を横に振りながら、土蔵から母屋に戻って来た。
工藤佳子は、長い間の疲れをすっかり取り去り、綺麗に化粧をし、別人のような美人に変身して応接間に現われた。派手でも、着る物の趣味の好さは、美砂にも分った。
やや捲れあがった唇を濡らして、口を開く。

「香川七重さんは飢餓に苦しみ、うわごとを発し幻視や幻聴に襲われ、獲物でも摂るつもりで、御自分が御自身を切りつけて、血を吸い肉を召し上がったんですよ。私の、制止や叱責も何の役にもたちませんでしたわ」

刑事は苦笑しながら首を振った。

「では何故、一緒に閉じ込められた貴女だけが飢えず、幻覚にも囚われず、香川さんを見守っていることが出来たんです」

「二人は土蔵の中で、いや応なしに二十二年前の決着を迫られました。二人はそれぞれに、言いたいことを言って、お互いの思い違いを訂正しようとしました。そんな時入ってきた美砂がこともあろうに、私の背を刺したんです。私は暫く意識を失いました」

「違うわ！　私じゃない」

美砂が恐怖にかられた声で叫び、握っていた盟の遺書を刑事に押しやった。

「でも出血の割には傷が浅かったらしく、七重さんがブランデーで洗ってくれたので、何とか化膿せずにすみました。七重さんは閉じ込められたことを知ると、扉を叩き、叫びつづけて、階段を上下し、すっかり体力を消耗させたのですよ」

「それだけで、これほどの差が出るというものではないでしょう。二十一日間とおっしゃいましたね、

二十一日ですよ。何も食べずに生きられる筈がないじゃありませんか？」
「二十一日間しか経っていないんですのね、私は七重さんより一週間早く、土蔵の中に篭っていましたから。何日も何日も飢えて苦しみました。私は彼女が冷蔵庫に夢中になっている間に、水を確保しました。蔵の手水鉢です。三日前、新しく入れ替えておきましたから、私はそれを持って来て傍におきました。七重さんは他人の蔵や持物に遠慮もあって、探しきれなかったのでしょう。私が蔵に入ったのは、最近骨董類が盗まれたこともあって、点検の必要があったからです。仕事も終ろうとしている時に鍵をかけられてしまったんです。蔵座敷はこれから夏に向かって、住み心地がいいんですのよ。私は彼女より貪欲に口に入れるものを探しましたが、組石の下の湧き水は干上がっていましたし、非常食など何処にもありませんでした。トイレの汲み取り口も、密閉されていました。私は化粧道具とビタミン剤だけは手放したことがございませんから、それで随分助けられました。何故、七重さんに分けてあげなかったのか、とおっしゃるのですか？　極限状況にいれば、どちらが、生き残るかの問題ですわ。モラルは問題になりませんよ。彼女は脱水状態になると……いいえ、刑事さんお調べになって下さい。彼女は長い間入院していたと言ってましたけれど、精神を患っていたんですのよ。だから幻視や幻覚に取り憑かれると、ご自分から死を招いたのですわ。本となんです」
「いい加減なことを言わないで下さいよ。彼女にとっては絶対に切り取れない場所が切り取られてい

ます」

玉木警部補は前屈みになり絶望したように言った。

佳子は狼狽しながら警部補を窺ったが、自分に課せられた気位の高さを取り戻そうとするように、居住まいを正した。

「私は盟が夫を殺したことを知っていました。あの日、新しいシャツを着せましたのに、帰った時はランニングシャツ一枚になってズボンの裾を捲り上げていましたの。あとでそっと調べてみましたら、ズボンの裾には血痕がついていました。ですから、いよいよの時は一緒に死んで上げたいと思い、家庭教師も断り、一家心中を考えていました。美砂はかわいそうだけれど、まだ十三歳。一人で生きていける筈がありませんもの、道ずれにするつもりでした。盟は父親を殺したのですから、死ぬしかなかったのですけれど、私は盟を一人で旅立たせる気にはなれなかったのです。盟は気位高く、人の下では生きていけないような精神構造に私が育て上げたんですのよ。でも、盟が本当に一人で死ねるなんて、私考えても見ませんでしたわ。ですから、私は土蔵の中で盟が私を必要とする日を待っていたんです」

「それで、貴女はどんな食糧を見つけたんでしたっけ」

玉木警部補が耳を掻いていった。

「夢ですわ、夢の中で最高の食事をすることが可能になったんです。私には幸い水がありました。それより前、蔵の中に差し入れられた、コーヒーの香りがした時には、さすが、跳び出して行って、飲みたかったのですけれど、私は飽くまで盟の行く末を見届けたかったので、我慢しました。父親を殺した盟ですもの。毒入りの食事を持って来たに違いないと思いました。それを七重さんも怖れて食べなかったようです。そこまでは正気だった彼女も、その二日後くらい、多分、その頃から、幻覚に操られるようになったのですわ。でも彼女は勝ったんです」

「貴女は生きているじゃないですか。香川七重さんは死んだ。彼女は貴女の傷の消毒までしてくれたのに、あなたは水の一滴も与えなかった。何故彼女が勝ったと思うのです？」玉木警部補が身を前に乗り出し低い声で言った。

「彼女は私を刺殺し、私を食べている幻覚のなかで亡くなったのですよ。盛んに独り言を言っていましたもの。私に対する恨みを晴らす恍惚感にいたんです」

「幻覚で自分を食う、想像出来ませんな。仏様になってまで自分を食べ続ける必要はなかったと思いますがね。飢餓の場合、二日も経つと、食欲は無くなると言いますが？」

「刑事さんはそういう状態に置かれた経験がないからお分りにならない、極限状態にいると、結局自分が誰だか定かでなくなるのですよ。共通の幻覚のなかで、自然のうちに私が餌食になり、彼女が私

になり、私が亡くなったのです」
「詭弁を弄するんじゃない！」
名寄刑事がテーブルを叩いた。
「現実は夢を超えるんですのよ。絶対なんてありえません。七重さんは御自身を食べ飽きると、今度は私を狙って、刃物を振り回していらっしゃったんです」
誰かが耐え切れなくなってくすくす笑った。
「あの地獄から戻った私としては、私の受け止めた記憶で語るしか出来ませんでしょう。本当の話なんです！」佳子は開き直った。
「私は閉じ込められていたんですよ」
「さあ、どうですかな。土蔵の鍵が掛けられていたのは、はじめの二日間だけだと、盟君は遺書に書いている。そうだったんですね」
玉木警部補が美砂を見た。
「三日目の朝食を差し入れた後、扉は閉めたけど、閂も、鍵も掛けなかったわ」
美砂は小さな声で言った。
「まさか！　そんなこと……」

佳子は絶句した。こうなれば只の食人鬼事件になってしまう。
玉木警部補は盟の遺書を握り緊めている。美砂はひっそりと部屋の隅に坐り、佳子から目を放さない。佳子は守勢に立たされていた。
「それから盟さんの遺書で、工藤栄介さんはやはり自殺であったと確認できました。解剖所見では同一刺切瘡が二箇所認められ、同一人によるものとされていましたが、致命傷になったのは後からの傷で、午後八時前後のものであることが判明していました。その時間には、盟くんは家に帰っていたんです」
「では、盟では……」
「そうです。傷を負わせたものの、致命傷ではありません。今ほっとするというのも変ですが……」
「嘘！　嘘です。主人がどうして自殺などいたしますの。何の理由もないじゃありませんか。一体何に不足があって……」
佳子がわめいた。
「自殺するようなタイプだとか、でないとか、わからないものです。御主人は自殺タイプじゃないとおっしゃっても、助手の方に自分の人生は失敗だったと話して居られた、それは仕事のことなのか、家庭のことなのか、今となって聞くことも出来ませんが……」

玉木警部補は悲痛な表情で言った。
佳子は部屋の中にいる者を見回してから、救いを求めるように美砂を呼んだ。
「美砂！　美砂！　美砂いらっしゃい！　可哀想な美砂、いくらお利口さんで、しっかりしていても、あなたには、まだ分らないことが山程あるのよ。みんな死んで、あなた独りぼっちで生きていけると本当に思っているの？」
美砂がおずおずと近づいて行くと、佳子は白い手を差し出した。

わたしに刺されたことも、わたしに閉じ込められたことも、知っていながら……わたしが香川七重をママと呼んだことも……七重を殺したのは母だと、わたしが刑事さんに言ったことも知っていながら……何故、母は手を差し延べているのか、美砂は理解に苦しんでいた。
後ろに目を向けると、二人の刑事が佳子を引き立てるために、立ち上がるのが見えた。
美砂は思い切って母の手を握った。手は驚くほど温かかった。佳子がこんなに優しくて、こんなに温かいのは、あの可哀想な香川七重を食べたせいだと美砂は思った。
佳子が美砂の手をそっと押しやった。

香川七重の死亡推定時、監禁後十一日目

死因　広範な刺切創による失血及び飢餓

尚、生前から死後にわたり切り取られたと推定される人肉量、1400グラム

完